第35回　古代史を解明する会

邪馬台国と高天原の関係

2023年11月11日
可児俊信

今月のテーマ

１「邪馬台国と高天原の関係」

立証手順

北部九州に弥生時代中期以降に分立する小国が存在していた（＝天孫族の国と呼称）があったと考古学で示されている。

よって、

①天孫族の国＝高天原

②天孫族の国＝邪馬台国

がいずれも成立すれば、「高天原＝邪馬台国」が成立する

以下で、天孫族の国＝高天原　を示し、次に天孫族の国＝邪馬台国　を示す。

２　高天原＝邪馬台国　であれば、天照大神＝卑弥呼　も同時に成立する。

参考：記紀編纂までの宗教観の変遷

宗教	年	天皇	
自然崇拝			
祖先崇拝			
首長祖先崇拝			首長の巨大古墳
	崇神７年	崇神	大和神社、石上神社、大神神社創建
仏教	538	欽明	仏教伝来
	587		物部守屋ほろびる
	645	皇極	乙巳の変
	673	天武	天武天皇即位
	681	天武	「帝紀及上古諸事」編纂の詔勅
	692	持統	伊勢神宮行幸
	701	文武	大宝律令制定
	712	元明	古事記完成
	720	元正	日本書紀完成、不比等死去
	739	聖武	総社にオオナムチを祀る勅

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

天孫族の国は高天原か

記紀 「国生み」から神武即位直前までにおける神話的な記述

1　地上以外の世界が舞台
天上界（高天原）、地底界（根の国、黄泉の国）、海底界（海神国）

2　空想上の動物が登場
八岐大蛇、海神族（正体は大鰐）、話すウサギ、道案内する烏、光る鳶、小人、かかし　等

3　神の誕生
ウケイ、禊祓の最中に神が誕生、単性生殖、神の体液や死体から新たな神が誕生する

4　神なのに死ぬ
祖先神崇拝、首長祖先神崇拝であるので、祖先＝神＝人間であり、死ぬのは当然

5　他の神話類型の利用

史実を神話風に改竄

記紀編纂時の政治環境により史実が改竄され高天原が創作された

天武・持統朝における皇親政治の開始

＜皇親政治を実現するための要件＞

・皇族の地位が他の豪族より高いこと
・皇族の権原を神権におくため天皇の神性が必要
・皇族より正統性がある豪族（特に物部氏）がいないこと

皇族の神格化（記紀の記述）

・皇族の祖先が、どの豪族の祖先よりも権威・正当性があるとするため、記紀では他の豪族は皇族の従者だったとした
・皇族の祖先は神であり、地上に降り立ったとした

隠蔽したい史実

・天孫族が出雲族に支配されていた史実
・出雲族の存在
・饒速日を始祖とする物部氏が天皇家と姻戚関係にあった史実
・神武より先に出雲族（饒速日）が大和を支配していた史実

他の豪族の目もある中で、まったく架空のストーリーを描くことはできず、史実の矮小化、比喩化、省略、史実順の入替え等で記紀を制作した。

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

神話と考古学から読み取れる神代（2～3世紀）①

＜出雲国の勢力拡大＞

・2C期　出雲族は日本海交易の盟主ではあったが、小国分立の状態。
・スサノオがいずれかの小国を支配していた製鉄王を殺害→ヤマタノオロチ退治
・スサノオが出雲国連合/統一出雲国を成立させ、初代連合王/統一王となる
・連合/統一により国力を高め、北部九州に侵攻
・北部九州は小国分立のままでまとまっていないため敗退→福岡平野付近の戦傷遺跡
・激しい戦闘後に制圧→アマテラスの武装

古事記 「御髪を解いて角髪に束ね、左右の御角髪にも御鬘にも、左右の御手にも、たくさんの勾玉を貫き通した長い玉の緒を巻きつけ、背には千本の矢が入る靫を負い、脇腹には五百本の矢が入る靫を着け、肘には威勢のよい高鳴りのする靫を着けて、弓を振り立てて、堅い地面を股まで没するほど踏み込み、沫雪のように土を蹴散らして、雄々しく勇ましい態度で待ちうけた。」

・天孫族は甘木市（現朝倉市）の夜須川（現小石原川）まで後退した後、停戦交渉
→天安川でのウケイ

古事記 「二神が天安川を中に挟んで、それぞれ誓約をすることになった。」
書紀（第三の一書） 「日神が素戔嗚尊と天安河を隔てて、向かい合って誓約した。」

＜出雲族による北部九州支配＞

・北部九州の支配地を圧迫→スサノオの横暴
・スサノオは北部九州連合を成立させ、アマテラスを首長として間接支配
・スサノオとアマテラスが子供をもうける(宗像女神)→ウケイでの5男3女の誕生
・アメノホヒを人質として出雲へ送還

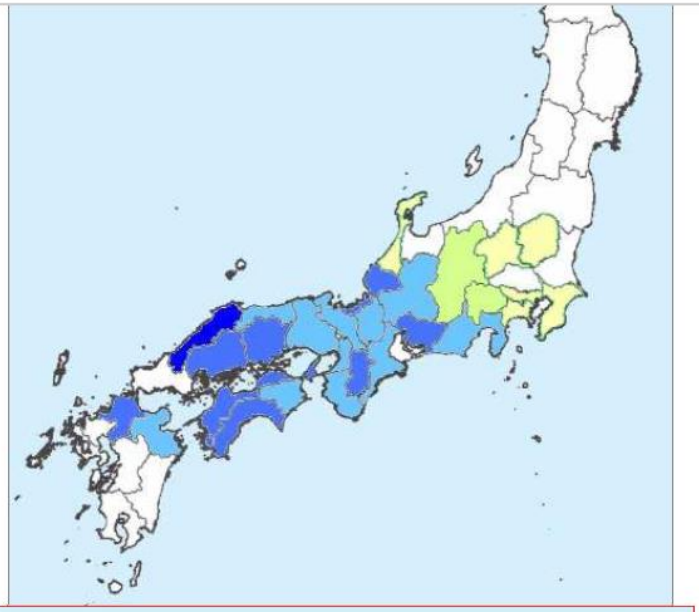
本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

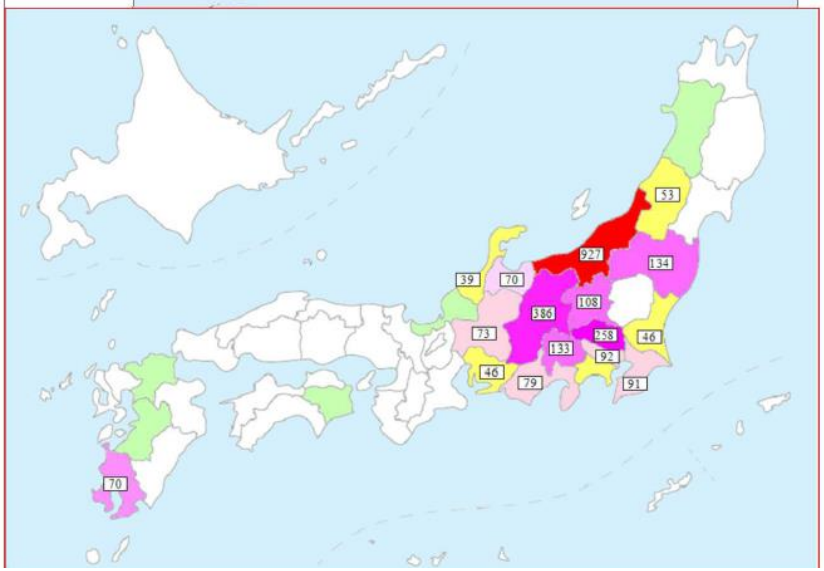
出雲族の最盛期の支配地域

4

出雲族の勢力範囲
青銅器埋納と神社の祭神の分布図から

- 青銅器埋納の分布図と神社の祭神の分布図は、その両方で、出雲族の支配地を表している。
- 青銅の武器祭器と銅鐸の分布は、支配地の拡大状況とその結果を示し、更に、氷川神社等・諏訪神社の分布は、その支配地域の拡大を示している。
  - 氷川・諏訪の両神社のすっぽりと抜けた栃木県は、なんと、味耜高彦根神を祭神とする神社のある地域。
  - 味耜高彦根神の行動範囲は、東北から、岐阜の藍見の喪山の神社に祭られる。
  - その後に本拠地（母親の故郷は宗像）に戻り、大乱で戦い、死亡したと考える。
    - 子孫は残っていない。
- 出雲族の支配地を、東北まで広げると、拡大のし過ぎとの批判が出そうだが、
  - 高地性集落の分布・北陸の天王山式土器の分布・アメリカ式石鏃の分布などの遺跡・遺物で確認できる。





出所：丸地三郎「「大和政権成立とその直後に起きたこと」古代史を解明する会（2022年10月）

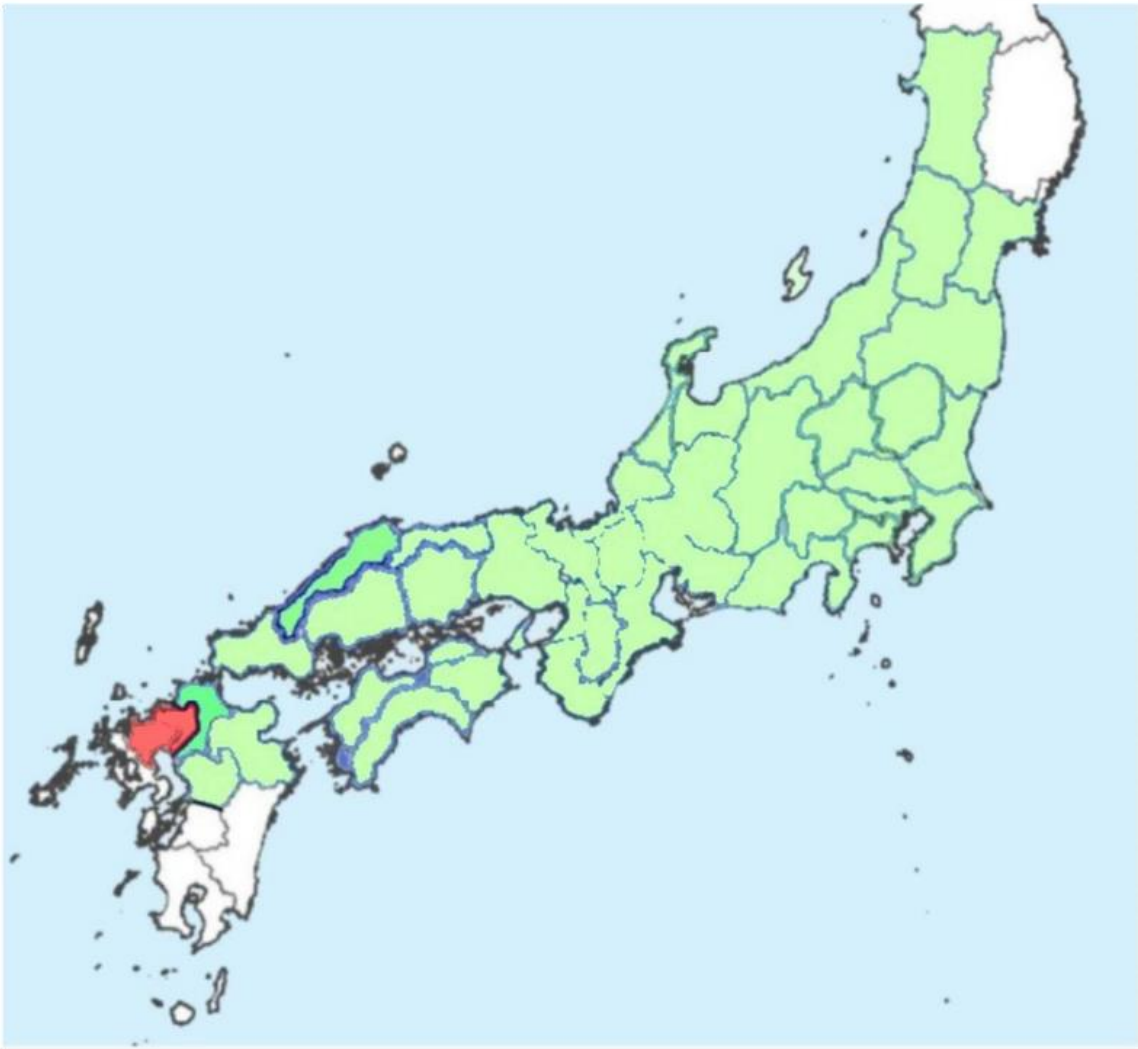
出雲族の最盛期の支配地域

5

天孫族と出雲族の支配地域区分（出雲族最盛期）

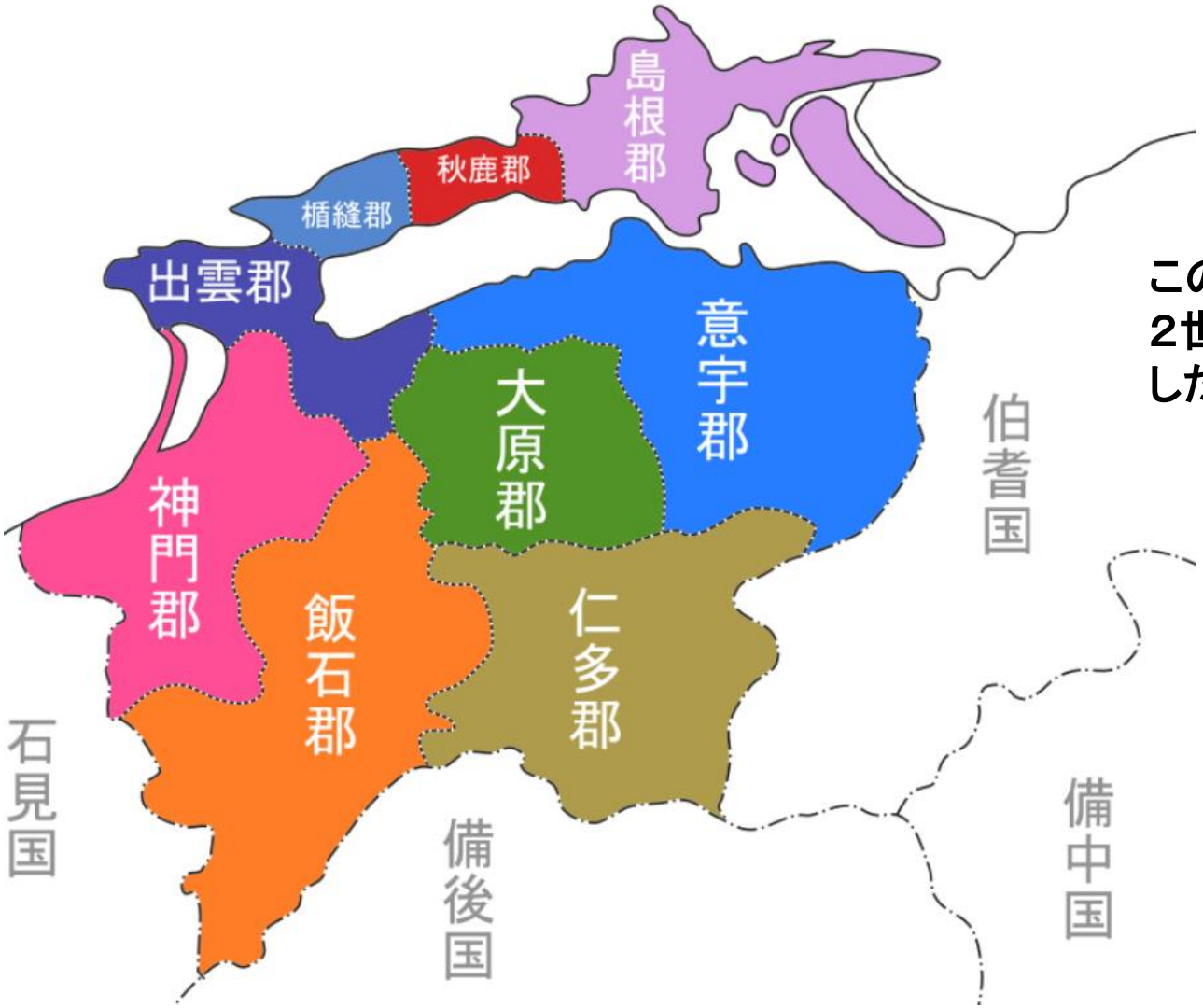
- 出雲族の支配地域の区分
  - ・埋納・副葬区分
  - ・戦傷遺跡分布
  - ・青銅祭器の分布（小銅鐸を含む）
  - ・主要遺跡
  - ・祭神による神社分

✓ 天孫族：赤系統色
✓ 出雲族：薄緑系統色



出所：丸地三郎「「大和政権成立とその直後に起きたこと」古代史を解明する会（2022年10月）

出雲国小国分立当時のイメージ



この図自体は出雲国成立後。
２世紀頃は、各郡がそれぞれ独立したクニだったと考える。

出所:「出雲風土記現代語訳」https://izumonokunifudoki.blogspot.com/p/blog-page_6.html

神話と考古学から読み取れる神代（2～3世紀）②

＜天孫族による他の部族との婚姻政策による版図の拡大＞

・ニニギ　・・・隼人族と婚姻→アタツヒメとの結婚
ホデリ(海幸）はアタツヒメの子
天孫族と隼人族の争い→海幸・山幸の争いと山幸の勝利
書紀本文 「兄の火闌降命は、「今後、私はお前の俳優の民になるから、どうか許してくれ」といわれた。彦火火出見尊は、これを許した。その火闌降命は、吾田君小橋の遠祖である。

・ヒコホホデミ（山幸）・・・海神族の豊玉姫と婿入り婚→豊玉姫との結婚

・ウガヤフキアエズ・・・玉依姫(豊玉姫の妹)と結婚し海神族の関係一層強化
→玉依姫との結婚

・狭野皇子（神武天皇）・・隼人族の吾平津姫と結婚→東征前に吾平津姫と結婚
書紀本文　日本磐余彦は成長されて、日向国吾田邑の吾平津媛を妃とされた。

＜出雲族の動向＞

・スサノオの死（または北部九州から出雲に戻る）→根の国に行く

・須勢理姫の娘婿であるオオナムチが出雲連合および北部九州連合を継承
→大国主となる

・オオナムチがアマテラスの長女タギリヒメ（宗像神）と結婚
書紀（第二の一書）皇産霊尊が大物主神に勅し、「我が娘の三穂津姫を、お前に娶あわせて妻とさせたい」

・ニギハヤヒが東遷し、大和を征服→ニギハヤヒの降臨（先代旧事本紀）

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

神話と考古学から読み取れる神代（2～3世紀）③

＜天孫族の攻勢＞

・天孫族は大和の動向を情報収集→饒速日の死の情報を得る

（先代旧事本紀）速風の神が饒速日の死亡を確認しタカミムスビに報告

・天孫族は出雲を婚姻政策で奪おうとしたが不首尾→アメノホヒ、アメノワカヒコの派遣

・スパイを派遣→無名雉（ななしきぎし）の派遣

・オオナムチが死去後、後継者争いが発生し、軍事力で制圧→国譲り

・オシホミミが奪還した北部北部九州へ→オシホミミの降臨準備

しかし早世し、後任でニニギが北部九州へ→天孫降臨

その際、前の支配者である猿田彦が案内→猿田彦の先導

古事記 「「私は国つ神で、名は猿田毘古神と申します。ここにいる理由は、天つ神の御子が天降ってお出でになる、と聞き、ご先導の役にお仕えいたそうと、お迎えに参っている次第です」と申し上げた。」

・その後、猿田彦は出雲に戻り、出雲族を代理統治

書紀（第2の一書）オオナムチは岐神（猿田彦神）を二神に勧めて、「これが私に代ってお仕え申し上げるでしょう。私は今ここから退去します」と言い、永久にお隠れになった。その後、経津主神は岐神を先導役として、方々を巡り歩き、平定した。

・神武が饒速日の死後の大和へ→神武東征

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

記紀による史実の改竄の手法

記紀における史実改竄の手法

１　出雲族の消去
①スサノオ、オオナムチ、饒速日を天孫族の系譜に組み込み、出雲族の存在を消去
②猿田彦の出自・系譜を消去
③天香語山を高倉下と変名させ、出自・系譜を消去
④出雲族の人名をクエビコ、少彦名、「オオナムチの幸魂奇魂」等に変名

２　皇族の祖先を神とするため、北部九州を天上界の高天原と擬す

３　出雲族支配の痕跡の消去
・スサノオの出雲の権力者討伐を、アンドロメダ型神話に置き換え、大蛇討伐に擬す
・出雲族の北部九州侵攻を、スサノオと天照大神の兄弟喧嘩に擬す

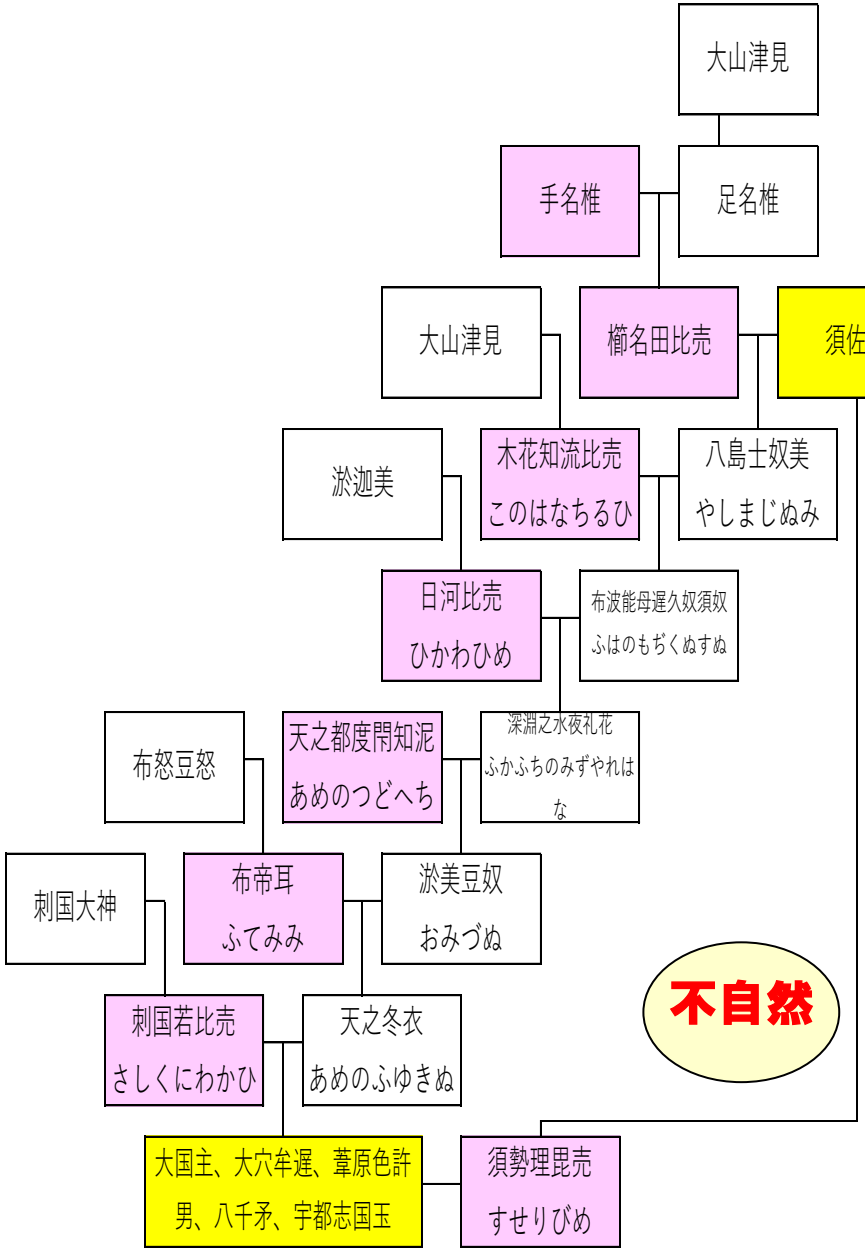
４　他の豪族が皇族の従者として役割を変える　天孫降臨の記述

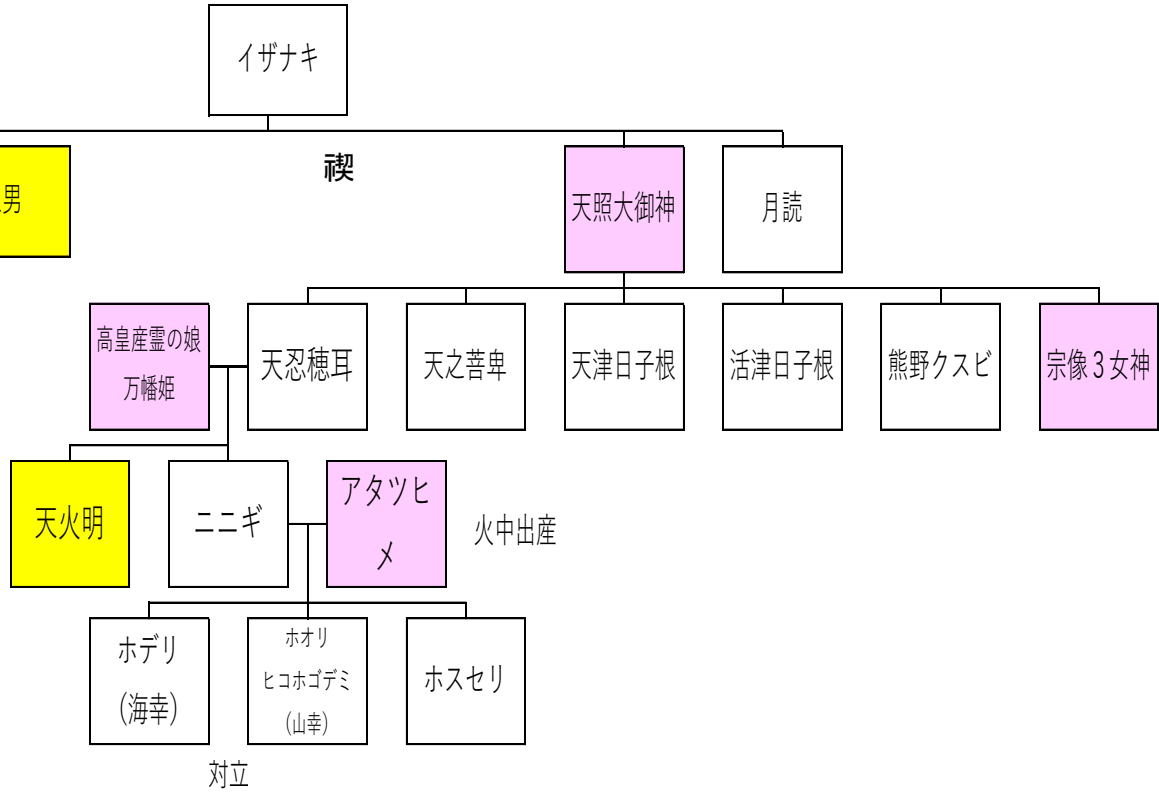
改竄により発生した矛盾

①オオナムチ　天孫族でありながら、天孫族に出雲を奪われる→国譲り
②オオナムチ　国を奪われる一方で、大和の神とされる→三輪山の神
②饒速日　天孫族でありながら、天孫族（神武）に大和を奪われる→神武東征

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

出雲族を天孫族の系譜に組み込み（古事記）

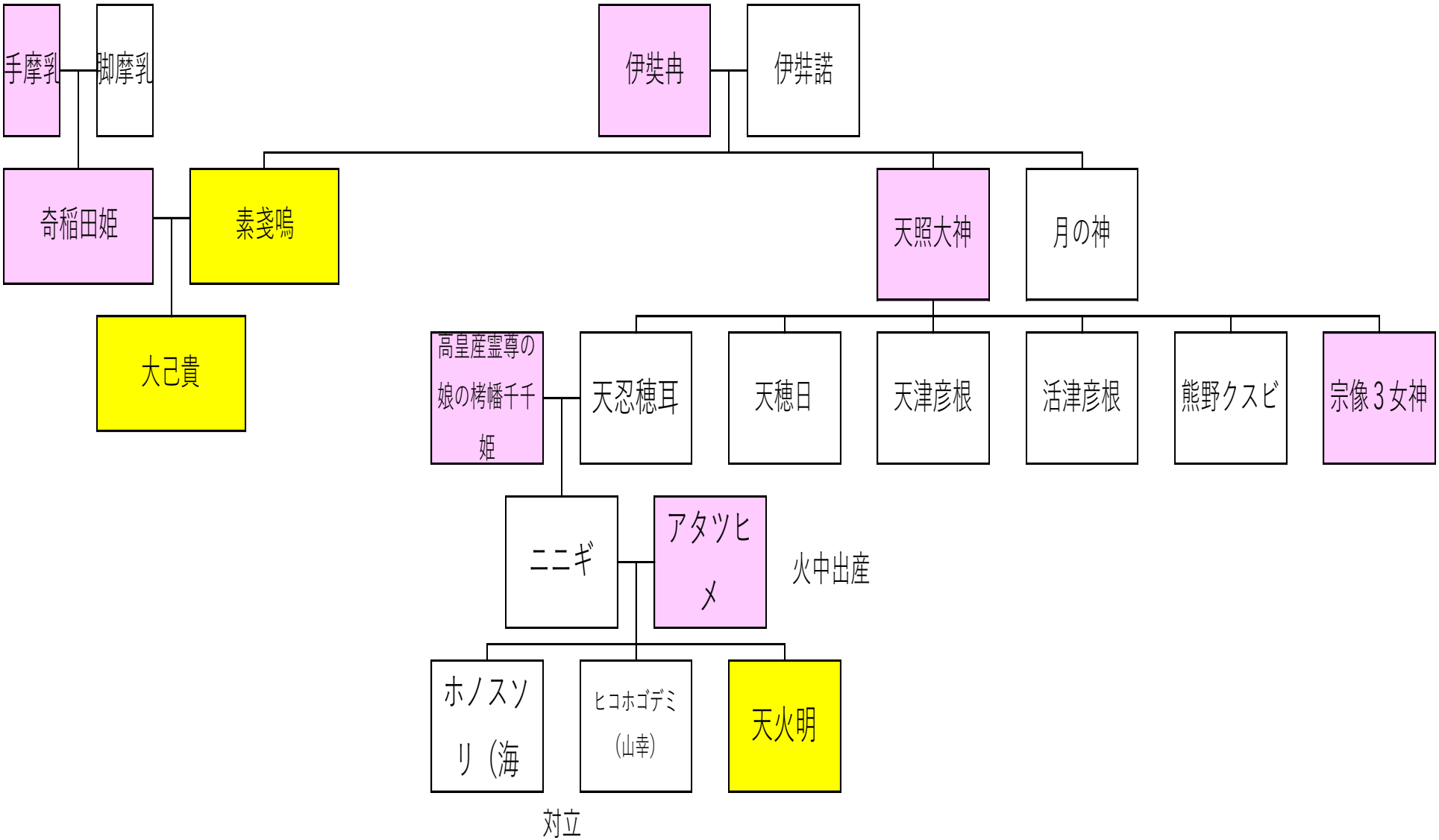




スサノオ、オオナムチ、スセリヒメとも出雲風土記に登場しており、出雲族とみるのが妥当

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

出雲族を天孫族の系譜に組み込み（日本書紀本文）



本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

出雲族を天孫族の系譜に組み込み（日本書紀一書）

オオナムチをスサノオの血族（＝天孫族）であると明記しない一書もある

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

出雲風土記の登場人物

出雲国風土記登場人物と地名		
支佐加比売きさかひめ	嶋根郡加賀の郷	神魂の子
天御鳥あめのみとり	楯縫郡	神魂の子
八尋鉾長依日子	嶋根郡生馬の郷	神魂の子
やひろほこながよりひこ		
天津枳佐可美高日子あまつきひさかみたかひこ又の名薦枕志都沼値こもまくらしつぬち	出雲郡漆沼の郷しつぬ	神魂の子
伎比佐加美高日子きひさかみたかひこ	出雲郡神名火山（仏経山）	社ある
宇武加比売うむかひひめ	嶋根郡法吉の郷	神魂の子
イザナミ	神門郡古志の郷	
都久豆美　　（つくつみ）	嶋根郡千酌の駅家	伊佐奈枳の子
須佐之男	意宇郡安来の郷	
	嶋根郡山口の郷	都留支日子命つるぎひこ
	飯石郡熊谷の郷	久志奈太美等與麻奴良日売くしなだみとあたはすまぬらひめ
	飯石郡須佐の郷	
	大原郡佐世の郷	佐世の木
	大原郡御室山	土窟、石窟
熊野大社の祖神	意宇郡出雲の神戸	イザナギの子
青幡佐久佐日古あおはたさくさひこ	意宇郡大草の郷	須佐之男の子
青幡佐草日子あおはたのさくさひこ	大原郡高麻山たかさ	御霊
都留支日子つるぎひこ	嶋根郡山口の郷	須佐之男の子
	嶋根郡布自伎弥の社　ふじきみ	松江市朝酌
国忍別（くにおしわけ）	嶋根郡方結の郷	須佐之男の子
衡桙等乎与留比古つきほことおよるひこ	秋鹿郡多太の郷	須作能乎の子
和加須世理比売ワカスセリヒメ	神門郡滑狭の郷	須佐能乎の子 南佐
八束水臣津野やつかみずおみつの	意宇郡	大国主の祖父
	嶋根郡	〃
赤衾伊農意保須美比古 佐倭気能	出雲郡伊努の郷	意美豆努の子おみずぬ
赤衾伊能意保須美比古あかふすまいぬおほすみひこ	秋鹿郡伊農の郷	天甕津日女あめのまかつひめ
佐和気能の后さわけの		

出雲風土記の登場人物

大穴持	意宇郡母理の郷	
	意宇郡野城の駅	
	意宇郡出雲の神戸	
	嶋根郡加賀の郷	佐太御子社
	出雲郡杵築の郷	寸付
	出雲郡宇賀の郷	神魂の娘綾門日女に求婚　あやとひめ
	神門郡朝山の郷	眞玉著玉之邑日女またまつくたまのむらひめと結婚。土着主権女神。
	神門郡八野の郷	須佐能乎の子八野若日女と結婚。
	飯石郡三屋の郷	三刀矢
	飯石郡多禰の郷	須久奈比古種
	仁多郡布勢の郷　　ふせ	布世
	大原郡神原の郷	神財の郷
	大原郡屋代の郷	八代
	大原郡屋裏の郷	矢内
	大原郡城名樋山きなび	
大国主	意宇郡拝志の郷	
	意宇郡宍道の郷	
	嶋根郡手染の郷	
	嶋根郡美保の郷	高志の意支都久辰為（おきつくしい）の孫娘奴奈宜波比売との子御穂須須美（みほすすみ）
	楯縫郡久潭の郷くたみ	久多美、忽美
	大原郡来次の郷	
山代日子	意宇郡山代の郷	大穴持の子
阿陀加夜努志多伎吉比売あだかやぬしたききひめ	神門郡多伎の郷	大穴持の子 多吉
和加布都努志能わかふつぬしの	秋鹿郡大野の郷	大穴持の子
	出雲郡美談の郷	三太三　またみ
阿遅須枳高日子	意宇郡加茂の神戸	大国主と宗像奥津宮の神の子
	神門郡やまやの郷	子、土地の神
		やむや毘古能の住まい止屋
	神門郡高岸の郷	高崖

出雲風土記の登場人物

阿遲須枳高日子の后	楯縫郡神名備山（大渋山）	多伎都比古たぎつひこ
天御梶日女との子水神	多久の奥峰　雲見峠の字　立石石神	
阿遲須枳高日子	仁多郡三澤の郷	
日置君目烈（まれ）	意宇郡新造の院	日置君猪麻呂の先祖（いまろ）
日置臣志毘（しび）	意宇郡舍人の郷	欽明帝の世舍人の君の先祖
布都努志	意宇郡楯縫の郷	
	意宇郡山国の郷	
宇乃治比古うのじひこうのじひこ	楯縫郡沼田の郷ぬた	海神
宇能治比古水神	大原郡海潮の郷	父神須美禰を恨み。得塩。
宇夜都辨うやつべ	出雲郡健部の郷	景行が定める出雲臣と同族の神門臣古禰が健部名のるかんどのおみふるね
神門臣伊加曾然かんどのおみいかそね	神門郡かんど	天穂日命１２世孫、鵜濡淳命の子うしたすとどめ
佐與布	神門郡狭結のうまや	越の国の人最邑
伊毘志都弊いいしつしべ	飯石郡来嶋の郷	土地の首長・女神支自眞
波多都美はたつみ	飯石郡波多の郷	土地の神
樋速日子	大原郡斐伊の郷	樋
阿波枳閇委奈佐比古あわきへわなさひこ	大原郡船岡山	船を引き上げ、

スサノオとオオナムチの系譜に関する記紀の記述比較

	スサノオとオオナムチの親族関係	
	次世代	**5（6）世後の子孫（血族）**
記載文献	紀（本文）　スサノオの子 紀（第3，第４，第5，第６の一書）　スサノオとの血縁記載なし	古事記、紀（第1，第2の一書）
スサノオとスセリ姫の関係	・古事記　親子（娘） ・書紀　スセリ姫の記載なし	
矛盾点	スサノオとオオナムチの2代では出雲の文化社会を形成する期間が足りない	スセリ姫がスサノオの娘（古事記）なのに数代後のオオナムチと結婚
各記述へのコメント	①古事記、紀（本文、第１，第２の一書）で、オオナムチをスサノオの血縁としているのはオオナムチを天孫族の血統としたいため ②書紀がスセリ姫を記載しないのは、オオナムチと兄弟関係となるのを避けるため、またはオオナムチとの世代不一致を避けるため ③古事記で系譜が記載されている	
スセリ姫の実在性	①スセリ姫は古事記の各所に重要な役割で登場 ②先代旧事本紀、出雲風土記でも登場	

参考：須勢理毘売の実在性

１　古事記

①「根の堅州国にいる須佐之男が善いように考えて下さるでしょう」と言った。
指示に従って須佐之男のいる所にやって来ると、その娘の須勢理毘売が出てきた。
大穴牟遅の姿を見て、互いに目を見かわし結婚した。
「現国泰神となって、私の娘の須勢理毘売を正妻として、宇迦の山の麓に、太い宮柱を深く掘り立て、空高く千木をそびやかした宮殿に住め。こやつよ」と言った。

②八上比売は、先の約束どおり、大国主神と結婚された。そして八上比売は出雲へ連れて来たのだが、本妻である須勢理毘売を恐れて、その生んだ子は木の股に挿し挟んで因幡へ帰った。

③八千矛神の正妻の須勢理毘売は、たいそう嫉妬深い神であった。そのため、夫の神は当惑して、出雲国から大和国にお上りになろうとして、旅支度をして出発されるときに、片方の手を馬の鞍にかけ、片方の足を鐙に踏み入れて歌った。

２　日本書紀

登場しない

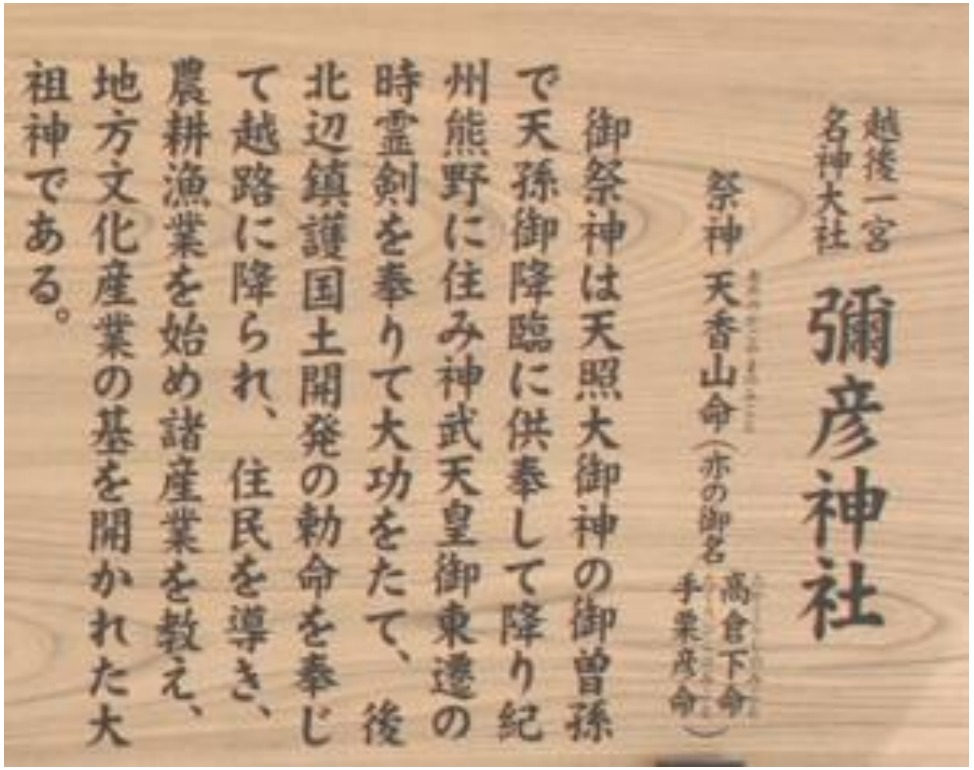
①から、スサノオの娘であり、オオナムチを婿取りした
②③から、スサノオの娘として、周りから恐れられていた

<u>須勢理姫の実在性は高い</u>
・須勢理姫はスサノオの娘
・オオナムチは須勢理姫の婿
→オオナムチはスサノオの次世代。オオナムチとスサノオは血縁関係はない

参考：天香語山と高倉下

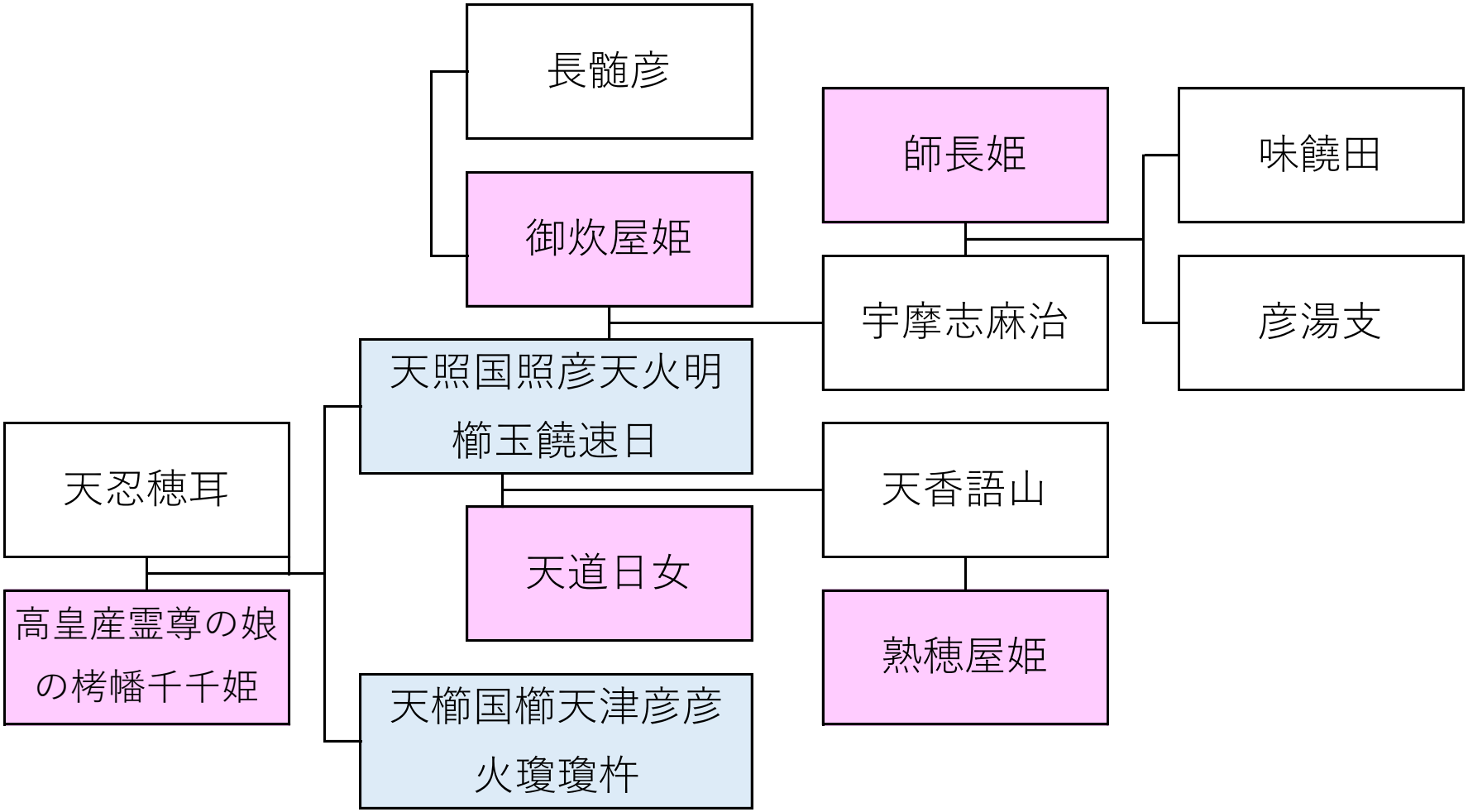
１　先代旧事本紀　饒速日と天道日女の子であり、ウマシマジの腹違いの兄にあたる
　　饒速日の大和への東征に同行
２　弥彦神社の由緒書　天香山＝高倉下＝手栗彦
３　古事記　　熊野の住民の高倉下として登場。神武に太刀を届ける
４　日本書紀　熊野の住民の高倉下として登場。
　　神武に国を平定した剣（フツシノ御魂）を届ける

＜書紀本文＞
そのとき、神が毒気を吐いて人々を弱らせた。するとそこに、熊野の高倉下という人がいた。
この人の夢に、天照大神がタケミカヅチノカミに語ってたことが、「お前が往って平げなさい」だった。
タケミカヅチノカミは、「私が行かなくても、私が国を平定したときの剣を差向けたら、国は自ら安定するでしょう」と言われた。
タケミカツチノカミは、高倉下に「私の剣は名を赴屠能瀰哆磨という。それをあなたの倉の中に置こう。それを取って天孫に献上しなさい」と語った。
翌朝、夢のお告げに従って倉を開いてみると、剣があり、庫の底板に逆さに刺さっていた。高倉下は、それを取って天皇に差し上げた。



参考：饒速日の系譜（先代旧事本紀）

・饒速日は古事記の系譜と同様に天孫族とされている
・記紀では隠されれている天香語山の系譜が書かれている



本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

参考：史実を隠ぺいするため利用した神話の類型①

類型	西欧・アジア	記紀
オルフェウス型	見てはいけないという約束を破り悲劇が訪れる話。旧約聖書では、ロトの家族がソドムから脱出する際、ヤハウェの使いから振り返るなと言われたが、ロトの妻が振り返ったため塩の柱にされた。	ヒコホホデミが豊玉姫の出産の様子を見るなと言われたが、覗き見て、ワニ竜の姿の豊玉姫を見たため妻が去った。
	ギリシャ神話では、ゼウスから開けるなと言われた箱(壺)をパンドラが開けたため、中から飛び出した災いが世界中に広がった(パンドラの箱)。ちなみに、禁止事項を破りたくなる現象をカリギュラ効果という。	亡くなったイザナミを連れ帰るため夫イザナギが黄泉の国を訪ねた際、イザナミから明かりをつけるなと言われたがイザナギが覗き、変わり果てた姿のイザナミを見たため二人は絶交した。
	妻を死後の世界から連れ戻す時、見るなのタブーを破り失敗する話。ギリシャ神話では、亡くなった妻エウリュディケを連れ帰るために夫オルフェウスが冥府を訪ねた時、冥界を出るまで背後の妻を見てはならないという条件を破ったため、妻は冥界に連れ戻された。	書紀　　倭迹迹日百襲姫命は大物主と結婚するが、彼が夜にしか現れないので、姿を見たいと言った。大物主は姿を見ても驚かないようにと言うが、翌朝、蛇に姿を変えて櫛箱に入っていた彼を見た倭迹迹日百襲姫命が驚いてしまったので、大物主は恥をかかせたと怒って山に帰ってしまった
アンドロメダ型	ペルセウスが怪物を倒し、生贄として捧げられていたアンドロメダを妻に迎えた。	スサノオがヤマタノオロチを倒し、生贄として捧げられる予定だったクシナダヒメを妻に迎えた。
ハイヌウェレ型	インドネシア神話　　財宝を排泄するハイヌウェレという女性を気味悪がった人々が生き埋めにして殺した後、死体を掘り返し断片に分け土に植えると食物が生まれた。	古事記　空腹のスサノオがオオゲツヒメに料理を作ってもらった際、食物がオオゲツヒメの身体中から排泄されたものだと分かったスサノオはオオゲツヒメを殺した。するとその死体から蚕と五穀が生まれた。
		書紀　月夜見は、天照大神の指示を受けて葦原中津国にお降り、保食神のもとを訪ねた。保食神が首を回し陸に向かわれると、口から米の飯が出てきた。海に向かわれると、口から大小の魚が出てきた。山に向かわれると、口から毛皮の動物たちが出てきた。それらの物を全部揃えて、沢山の机にのせておもてなしした。このとき月夜見尊は、憤然として、「けがらわしいことだ。いやしいことだ。」と言い、そして剣を抜いて、保食神を斬り殺された。その保食神の頭には牛馬が生まれ、額の上に粟が生まれ、眉の上に蚕が生まれ、眼の中に稗えが生じ、腹の中に稲が生じ、陰部には麦と大豆・小豆が生じていた。

参考：史実を隠ぺいするため利用した神話の類型②

類型	西欧・アジア	記紀
ニムロッド型	メソポタミア伝承　　猟師のニムロッドが神に矢を放ち、神がその矢を返しニムロッドの胸を貫いた。	古事記　書紀　　アメノワカヒコが神の使いのキジを矢で貫き、アマテラスがその矢を返しアメノワカヒコの胸を貫いた。
バナナ型	インドネシア神話　　初め神が人間に石を与えたが、人間が別のものを欲したため代わりにバナナを与えた。神は、石を選んでいたら不老不死になったと告げた。	古事記　記紀　ニニギが妻にアタツ姫のみを選び、見にくい姉の岩長ヒメを選ばなかったことで人間の寿命は短くなった
	旧約聖書では、エデンの園には生命の樹と知恵の樹があり、アダムとイブは知恵の樹を選んだため、エデンの園から追放され不老不死となる生命の樹の実を食べることができなくなった。	
	呪術で追っ手から逃れる話。 旧約聖書では、モーセがイスラエルの民とエジプトを脱出する際、海を2つに割り逃げた。エジプト神話では兄インプが無実の罪の弟バタを追いかけていた際、太陽神が現れ2人の間にワニのいる池を作り、弟は兄のもとを去った。	
生み損ない型	長子が奇形で捨てられる話。ギリシャ神話では、ゼウスとヘラの長子ヘパイストスが奇形だったため海に捨てられた。	日本神話では、イザナギとイザナミの長子ヒルコが奇形だったため川に捨てられた。
デーメーテール型	ギリシャ　穀物の神デーメーテールが娘を探須ため、失踪したことで世界の穀物が実らなくなった。バウポの神が裾を持ち上げ,陰部をさらし滑稽な仕草をしたことでデーメーテールが元の世界に戻った	岩戸に隠れた天照大神により世界が暗くなったため、アメノウズメが胸乳をかき出だし、裳の紙を陰部まで押し下げた。天照大神が岩戸からでた

氏族の墓記没収

691年（持統5年） 勅により氏族の墓記没収（日本書紀）

八月十三日、十八の氏（大三輪、雀部（さざきべ）、石上、藤原、石川、巨勢こせ、膳部こせ、春日、上毛野（かみつけの）、大伴、紀伊、平群、羽田、阿倍、佐伯、采女、穂積、阿曇）に詔して、その先祖の墓記を上進させた。

記紀で改竄した史実にあわせた神社祭神の改変

記紀で改変した歴史に矛盾しないよう神社の祭神も改変①

番号	改変手段	改変事例
1	本来の祭神名を隠す	①宇佐神宮　祭神　比売大神（ひめおおかみ）　同神宮では宗像三神と解釈している
		②佐太神社（南殿）　祭神　秘説四座
		③大和神社（おおやまと）　祭神　中殿：日本大国魂大神、左殿：八千戈大神、右殿：御年大神
		④筑紫神社　筑紫の神
		⑤向日神社（京都府）　祭神　向日神　向日神は他にどこにも祀られていない祭神名であり、本来の祭神名を隠すために創作された祭神
		⑥石上神社　祭神　布都御魂、布留御魂、布都斯魂
		⑦熊野本宮大社　祭神　家津美御子
		⑧那智大社　祭神　熊野夫須美
2	本来の祭神名を記紀で創作した神名に置き換え	①住吉大社　祭神　底筒男神、中筒男神、表筒男神　イザナギの禊の際生まれた水の神を創出し祭神名を置き換え。本来の祭神は出雲系か
		②熊野本宮大社　祭神　事解之男神、熊野速玉大社　祭神　速玉之男神　日本書紀（第10の一書）で「イザナギが吐かれた唾から生まれた神を名づけて速玉之男。掃き払って生まれたを泉津事解之男と名づけた」。本来は祭神は出雲系か。
		③向日神社他　祭神　火雷（ほのいかづち）　記、紀第9の一書で黄泉の国のイザナミの体から生まれたとする神
		④貴船神社　祭神　高龗（たかおかみ）　紀（第7の一書）「伊弉諾尊が軻遇突智を斬って、その一つは雷神、その一つは大山祇神、一つは高龗となった」（軻遇突智と雷、大山祇、高龗は同一神であることの暗示？） なお国津意加美神社（壱岐）の祭神はスサノオであり、社名はオカミ神社であることから、龗＝スサノオの可能性あり
		⑤丹生川上神社　祭神　罔象(みずは）神 記「伊邪那岐は迦具土の首を斬った。石折と根折、石筒之男、甕速日、樋速日、武御雷之男（建布都、豊布都）、次に、剣の柄に溜まっていた血から神が生まれた。闇淤加美と闇**御津羽**である」

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

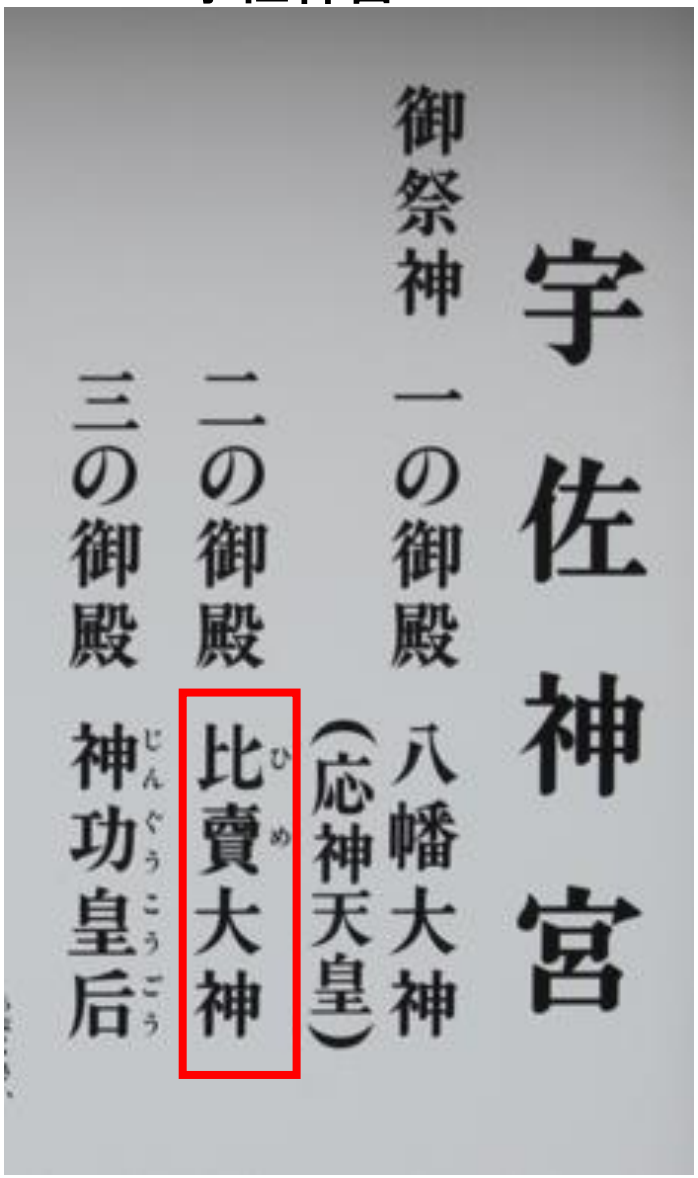
記紀で改変した歴史に矛盾しないよう神社の祭神も改変②

番号	改変手段	改変事例
3	異なる神の別名に置き換え	①大国主　記　「大国主神のまたの名は大穴牟遅、葦原色許男、八千矛、宇都志国玉。合わせて五つの名がある。」
		②大国主　紀（第6の一書）「大国主神は、**大物主神**とも、国作大己貴命、葦原醜男、八千戈神、**大国玉神**、顕国玉神ともいう。」（紀は記よりも別名はさらに増えている）
4	他の神を本来の祭神とともに配祀し、本来の祭神の影響力を薄める	①大神神社　祭神が大物主、配祀がオオナムチ、スクナヒコナ　なお、大物主とオオナムチが別神であることは明らか ①’　紀（第６一書）　「不思議な光が海を照らして、このとき大己貴神は「お前は何者か」と尋ねた。「私はお前に幸いをもたらす幸魂だ」。「あなたは私の幸魂奇魂です。」「三諸山に住みたいと思う」。これが大三輪神である。」大物主とオオナムチが同一神とする記述
		②漢国神社　717年（養老元年、元正３年）　同神社HP「藤原不比等がオオナムチとスクナヒコナを相殿に配祀」。本来の祭神は大物主
		③総社大神宮（越前市）由緒書「天平11年（739年）には、聖武天皇の勅願で諸国の総社に大己貴命を併せて祀る事になり、」
		④登美神社　本来の祭神（登美饒速日）の他の他の神を祀る

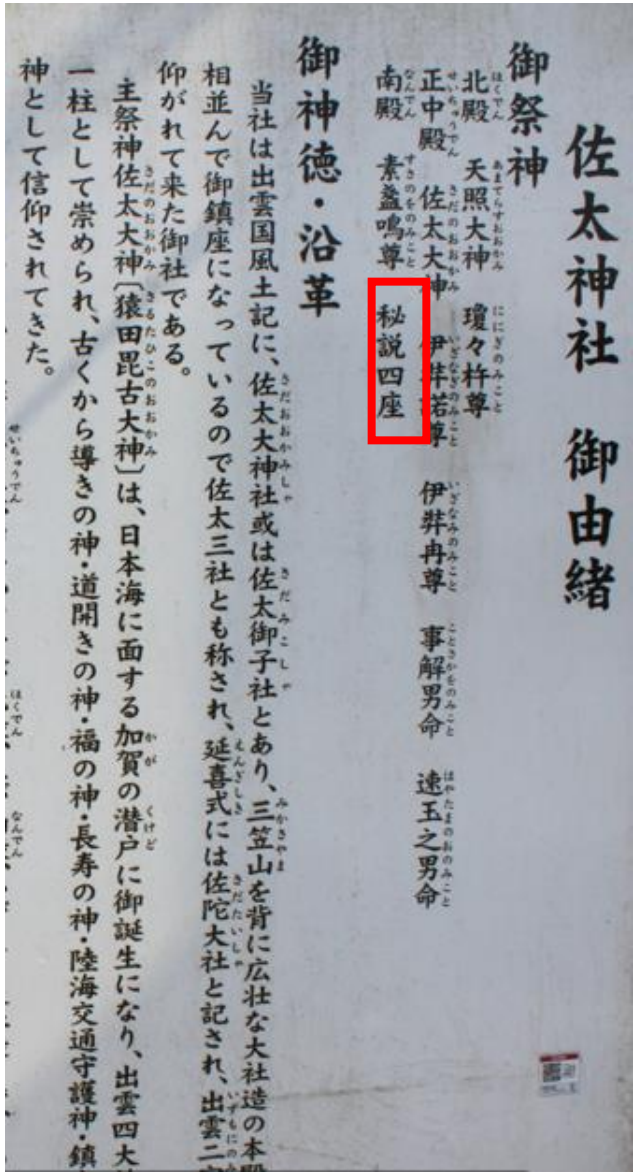
本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

隠ぺいされた神社祭神

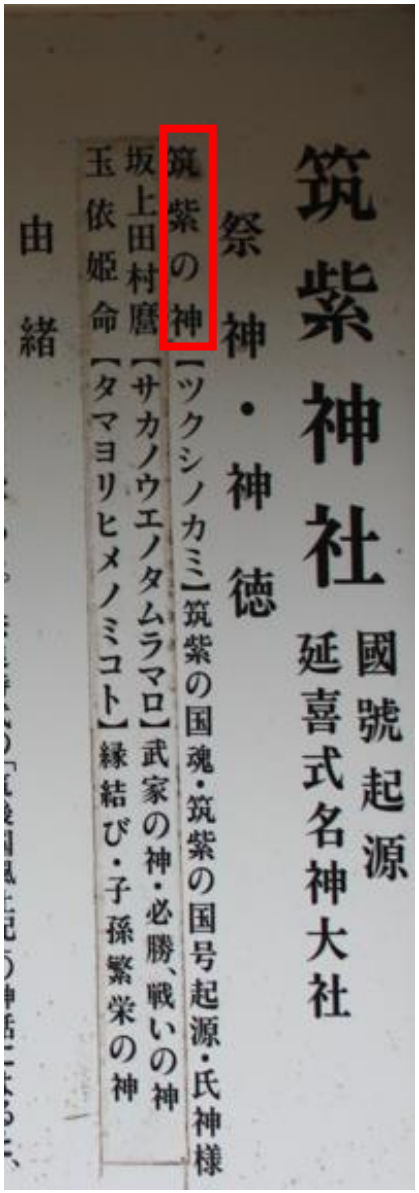
宇佐神宮



佐太神社

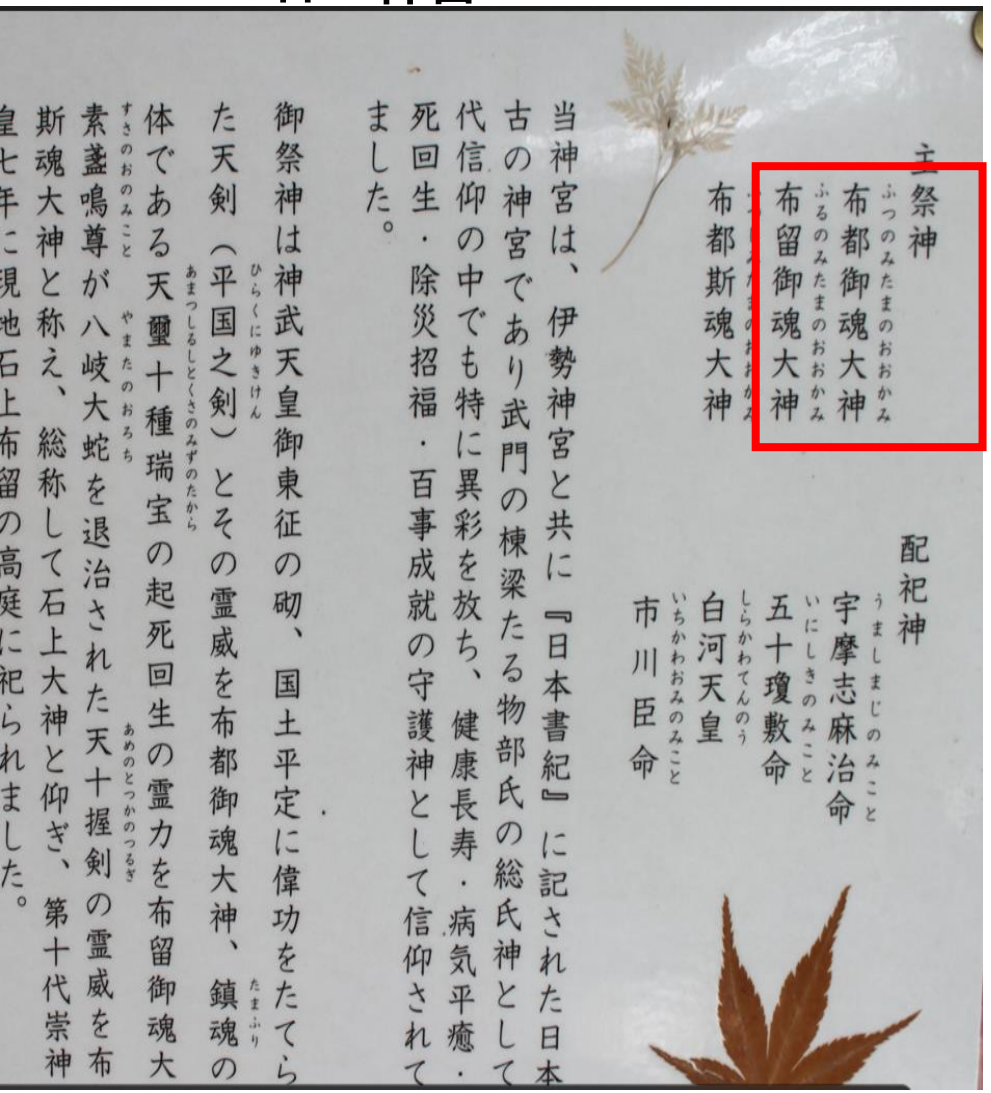


筑紫神社



隠ぺいされた神社祭神

石上神宮



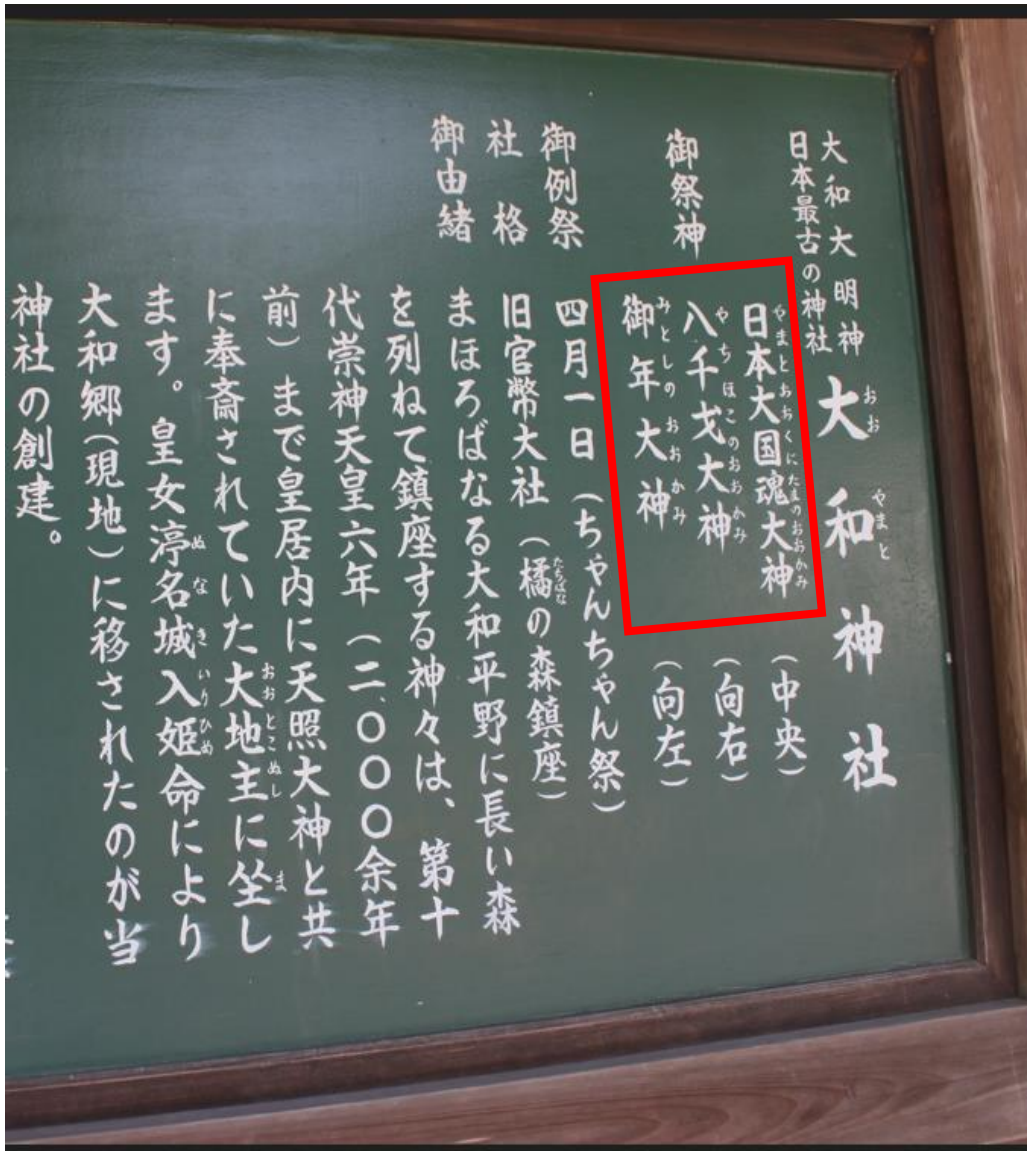
主祭神
布都御魂大神
布留御魂大神
布都斯魂大神

配祀神
宇摩志麻治命
五十瓊敷命
白河天皇
市川臣命

当神宮は、伊勢神宮と共に『日本書紀』に記された日本古の神宮であり武門の棟梁たる物部氏の総氏神として代信仰の中でも特に異彩を放ち、健康長寿・病気平癒・死回生・除災招福・百事成就の守護神として信仰されてました。

御祭神は神武天皇御東征の砌、国土平定に偉功をたてた天剣（平国之剣）とその霊威を布都御魂大神、鎮魂の体である天璽十種瑞宝の起死回生の霊力を布留御魂大素盞嗚尊が八岐大蛇を退治された天十握剣の霊威を布斯魂大神と称え、総称して石上大神と仰ぎ、第十代崇神皇七年に現地石上布留の高庭に祀られました。

大和神社



大和大明神
日本最古の神社
大和神社

御祭神
日本大国魂大神（中央）
八千戈大神（向右）
御年大神（向左）

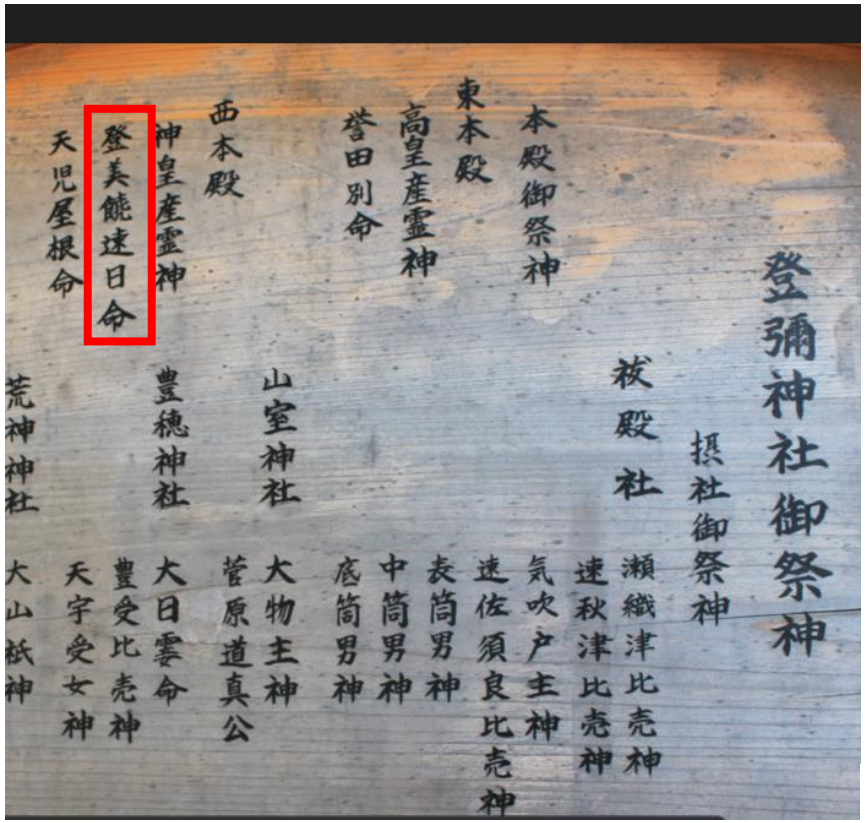
御例祭
四月一日（ちゃんちゃん祭）

社格
旧官幣大社（橘の森鎮座）

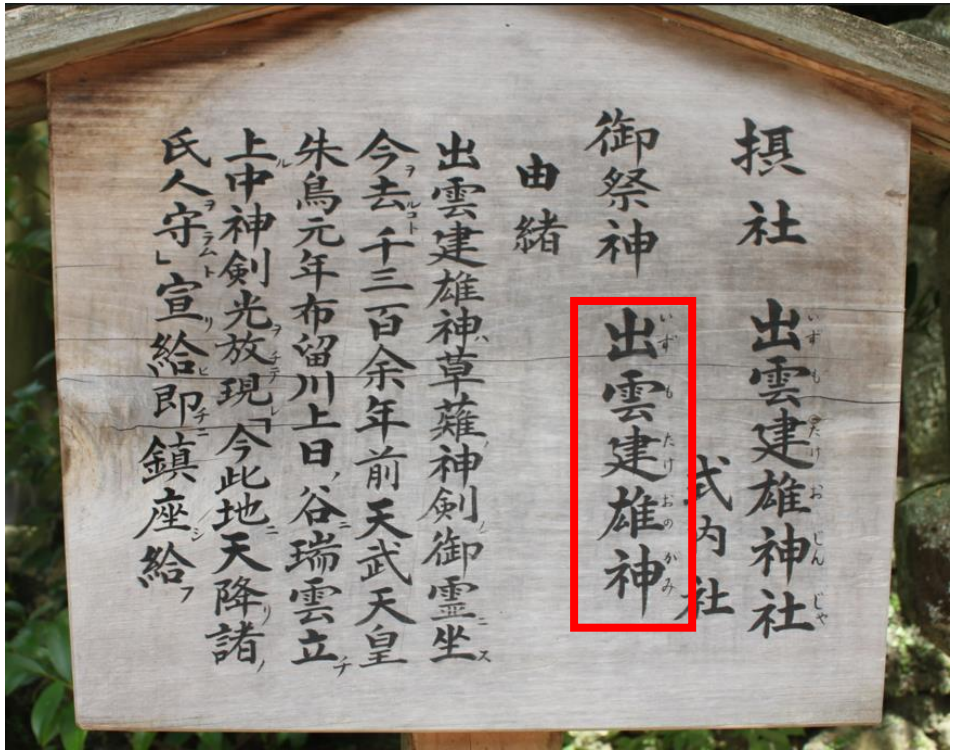
御由緒
まほろばなる大和平野に長い森を列ねて鎮座する神々は、第十代崇神天皇六年（二、〇〇〇余年前）まで皇居内に天照大神と共に奉斎されていた大地主に坐します。皇女淳名城入姫命により大和郷（現地）に移されたのが当神社の創建。

隠ぺいされた神社祭神

登弥（とみ）神社



出雲建雄神社



漢國神社

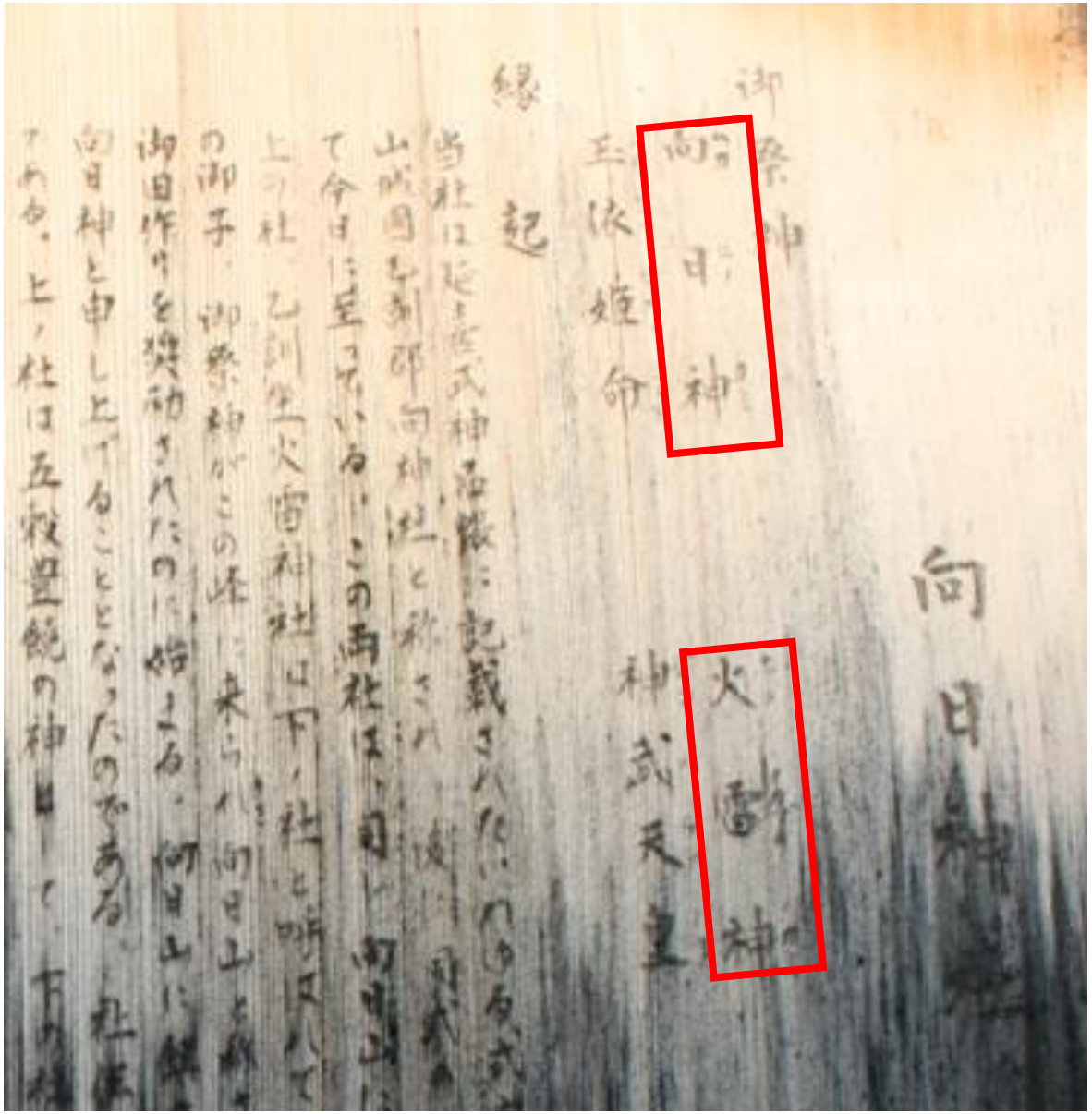
＜漢國神社祭神三座＞

園神　大物主命
韓神　大己貴命　少彦名命

一、鎮座由来
当神社は推古天皇の元年二月三日（今より約千四百年前）、大神君白堤と申す方が、勅を賜いて園神の神霊をお祭りせられ、其後元正天皇の養老元年十一月廿八日、藤原不比等公が更に韓神の二座を相殿として祀られたのが漢國神社であります。

隠ぺいされた神社祭神

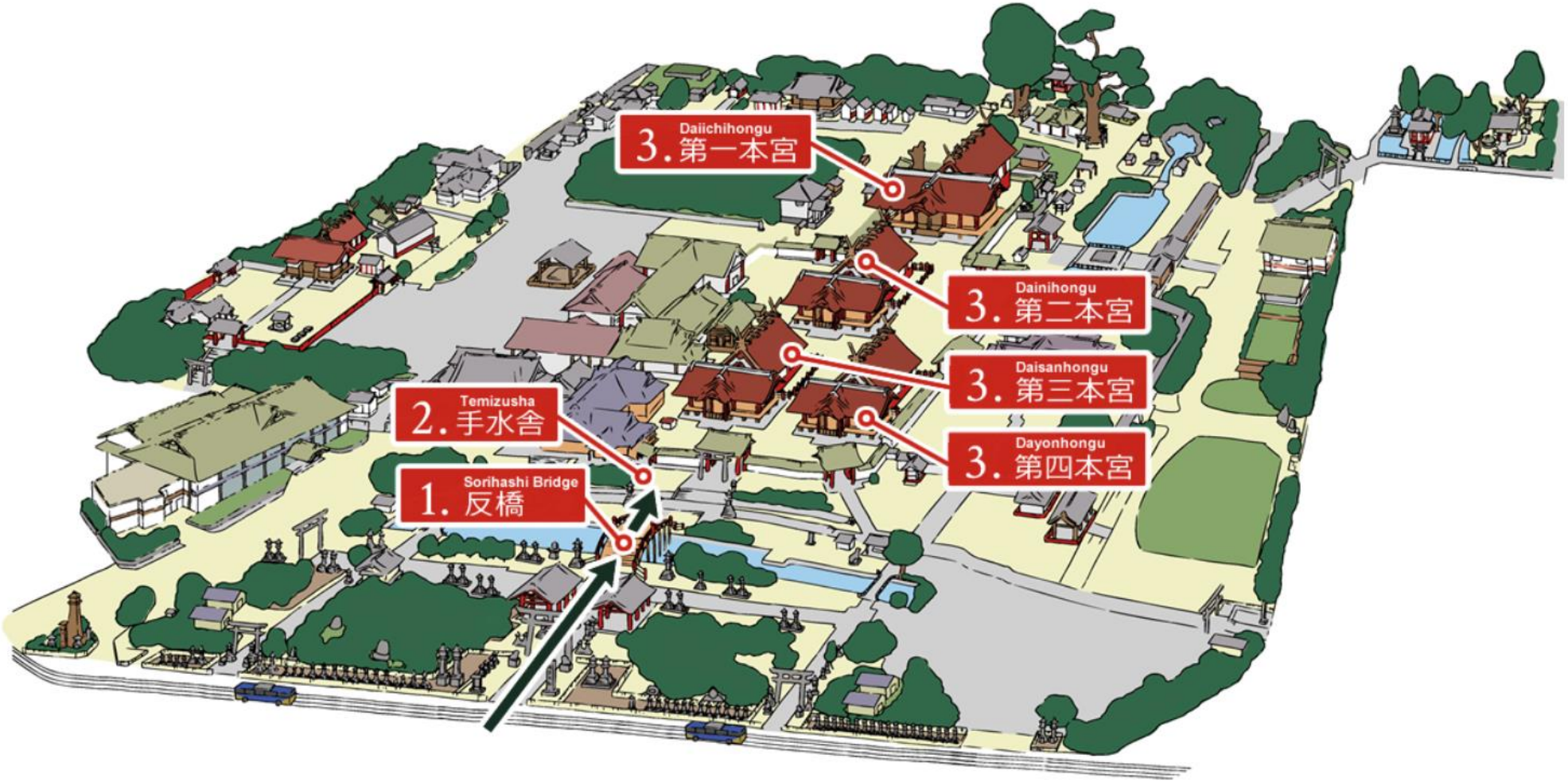
向日神社



祭神

玉依姫	向日神
神武天皇	火雷神

住吉神社境内図



出所：住吉神社HP

天孫族の国は邪馬台国か

実年代の試算

①高天原は、記紀が北部九州連合を神話化したもの。「北部九州＝高天原」
②「北部九州＝邪馬台国」は実年代（2世紀後半～3世紀中盤）が一致するかによる
北部九州国の実年代をいくつかの前提をもとに試算し、それが矛盾なく成立するかを確認

実年代特定の手がかり

＜魏志倭人伝＞

1	倭国大乱	2世紀後半（桓霊の間）
2	卑弥呼が女王の女王国	2世紀末～3世紀中盤
3	狗奴国との争い	247年前後
4	卑弥呼の死去	247年
5	台与の女王国継承	250年頃

＜記紀＞

1　神武天皇の即位年　　辛酉（かのととり）
2　崇神天皇の崩年　戊寅（つちのえとら）（古事記記載）
3　天皇の平均在位年数をもとに古代天皇の即位年・崩年を遡及し算出（安本美典氏ほか）
4　朝鮮史（「三国史記」「東国通鑑」）と史実年代の突合　ただし、神功・応神期

辛酉の年	121	181	241	301	361

戊寅の年	198	258	318	378

実年代特定の試案

1　絶対基準年の決定

実年代特定には、何らかの絶対基準年が必要
ここでは、倭国大乱を180年～182年の３年間とし仮置きし、基準年とした

2　記紀上の人物の生存期間の特定

・記紀主要人物の系譜を想定
・基準年および以下のルールをもとに記紀の人物の生存期間を算定し、矛盾がないかを検証

3　生存期間算定上のルール

恣意性を避けるため,機械的なルールを設ける
ルールA　男女とも60歳で死亡する（長命の卑弥呼、早世のオシホミミ，饒速日を除く）
ルールB　男女とも15歳で結婚する
ルールC　結婚した女性は、結婚後2年間隔で出産する（17，19，21，23歳・・・）
ルールD　結婚した男性は、結婚後1年間隔で子を得る（17，18，19，20歳・・・）

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

系譜の検討①

1　祖先崇拝の時期では、神＝祖先であり、神は実在人である

2　主要人物の系譜が記紀内で異なるのは、系譜が改ざんされている可能性が高い

記紀内の記述で、系譜に異伝がある神

神名	古事記	書紀本文	書紀一書
天照大神	イザナギの禊	イザナギとイザナミの子	①イザナギの禊 ②イザナギとイザナミの子 ③イザナギの鏡
スサノオ			
月読			
大国主	スサノオの六代の孫	スサノオと稲田姫の子	①スサノオの五代の孫 ②スサノオの六代の孫
タクハタチジ姫	高皇産霊の娘	高皇産霊の娘	①高皇産霊の孫
天火明（ニギハヤヒ）	オシホミミとタクハタチジ姫の子=ニニギと兄弟		①オシホミミとタクハタチジ姫の子 ②ニニギとアタツ姫の子

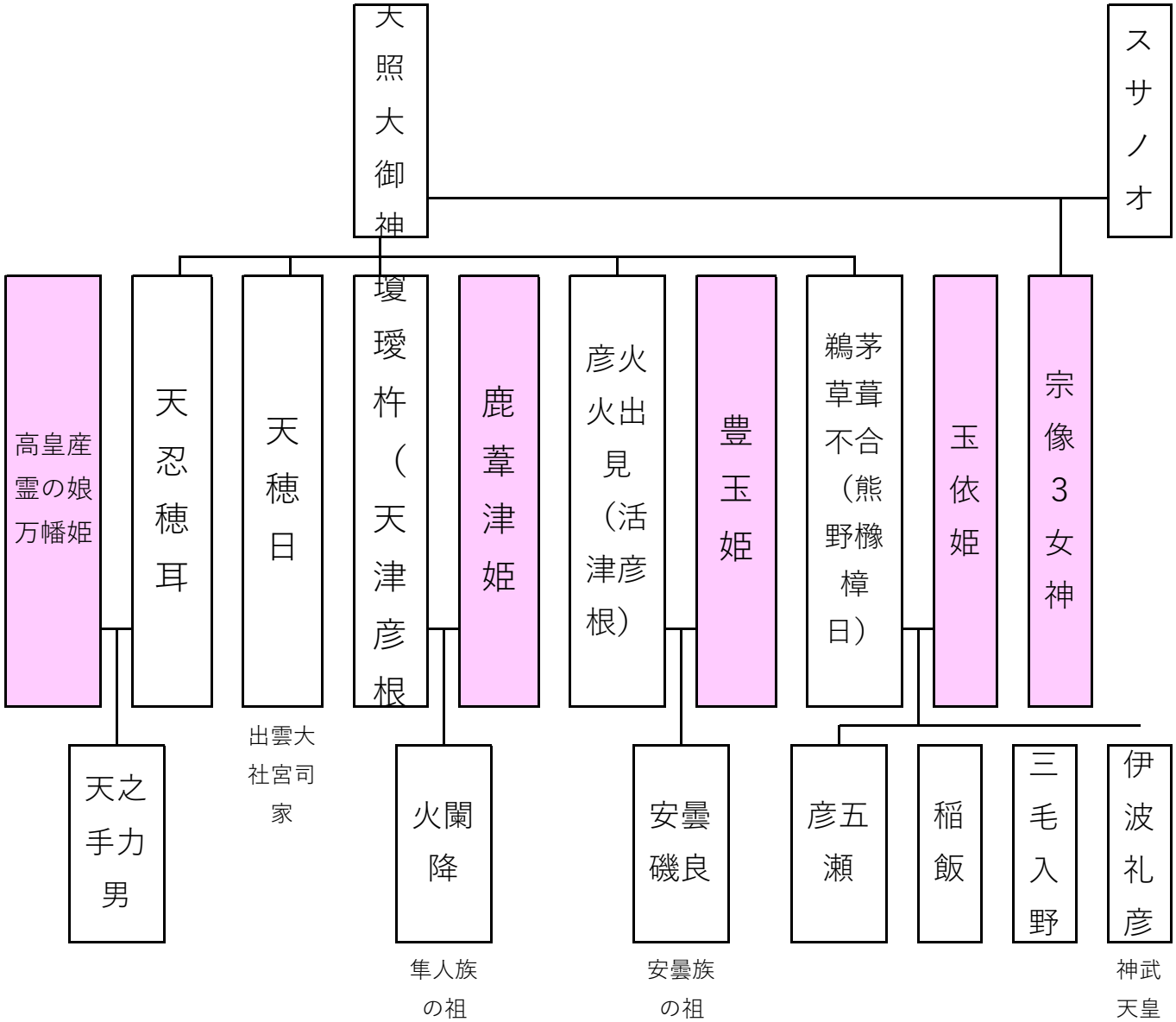
本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

系譜の検討②

記紀内の記述で、系譜が一致している神

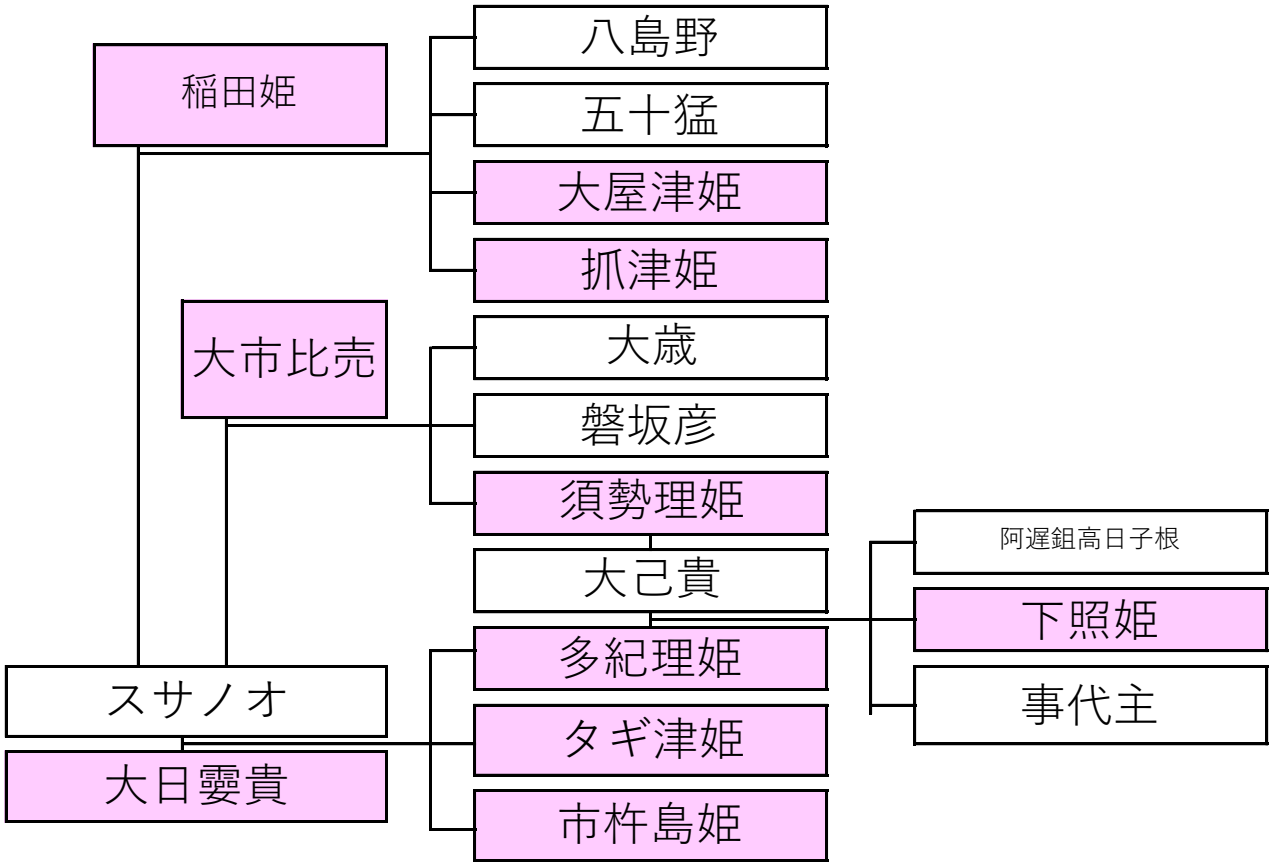
神名	系譜
カグツチ	イザナミ
ワダツミ三神	イザナギの禊
住吉三神	
宗像三女神	スサノオとアマテラスのウケイ
オシホミミ、アメノホヒ、活津ヒコネ、天津ヒコネ、熊野クスヒ	
稲田姫	テナヅチとアシナヅチの子
天若彦	天津国玉神の子
事代主	大国主の子
ニニギ	オシホミミとタクハタチジ姫の子
アタツ姫	オオヤマズミの娘
火照命	ニニギとアタツ姫の子
火勢理命　火闌降	
火遠理命（天津日子穂穂手見）	
ウガヤフキアエズ	ヒコホホデミと豊玉姫の子
ヒコイツセ、神武	ウガヤフキアエズと玉依姫の子

前提となる系譜（天孫族）



本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

前提となる系譜（出雲族）



本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

人物の生存期間算定上のルールによる生年・結婚年・死亡年

人物	従うルール	年代特定
饒速日	B	神社伝承では対馬で天道日女と結婚、天香語山誕生。対馬侵攻は倭国大乱の初期、180年に15歳となる
饒速日		①により生年は,165年
饒速日		先代旧事本紀では、饒速日は大和で長男出生前に死亡とされる。死亡年は饒速日東征後数年後
饒速日		オオナムチが北部九州に来た199年頃、饒速日の東征
スサノオ	C	神社伝承では饒速日＝大歳。大歳は神社伝承ではスサノオの第5子。饒速日誕生時にスサオノは21歳
スサノオ		190年、出雲に帰国。イチキシマ姫の出生年から1年後
スサノオ	A	142年生なら没年は、202年
天照大神	C	倭国大乱後（182年）、出雲国の支配下でスサノオとの間に、宗像３女神（184,186,188年となる
天照大神	B　C	宗像３女神の前に二子がいることから、161年生まれ
天照大神	A	魏志倭人伝では247年に死亡。161年生なら247年は86歳となる。現実性のある年齢といえる
天照大神	C	⑤によりスサノオ帰国後、再婚しニニギ以降の3子を出産（192,194,　196年）
ニニギ		⑧により192年生。⑩によりオシホミミ早世後、193年1才で天孫降臨。記紀の記述と近い
オシホミミ	C	倭国大乱前の178年生。タクハタチジ姫との間には子はいないことから15歳で死亡。死亡年193年
ウガヤフキ	B	⑧により196年生。211年結婚。
神武天皇	C	記紀では神武天皇は第３子である。⑪の211年＋（3人×2年)＝217年生となる
神武天皇	B	232年にアビラツ姫と結婚。その後離縁し、238年に東征へ
オオナムチ		⑤により190年に出雲国継承。
オオナムチ		199年、北部九州にてタギリ姫と結婚
アジスキタ	C	その後、201年にアジスキタカヒコネ、203年に下照姫、205年に事代主が出生
オオナムチ		その後に子がいないことから、207年頃死去

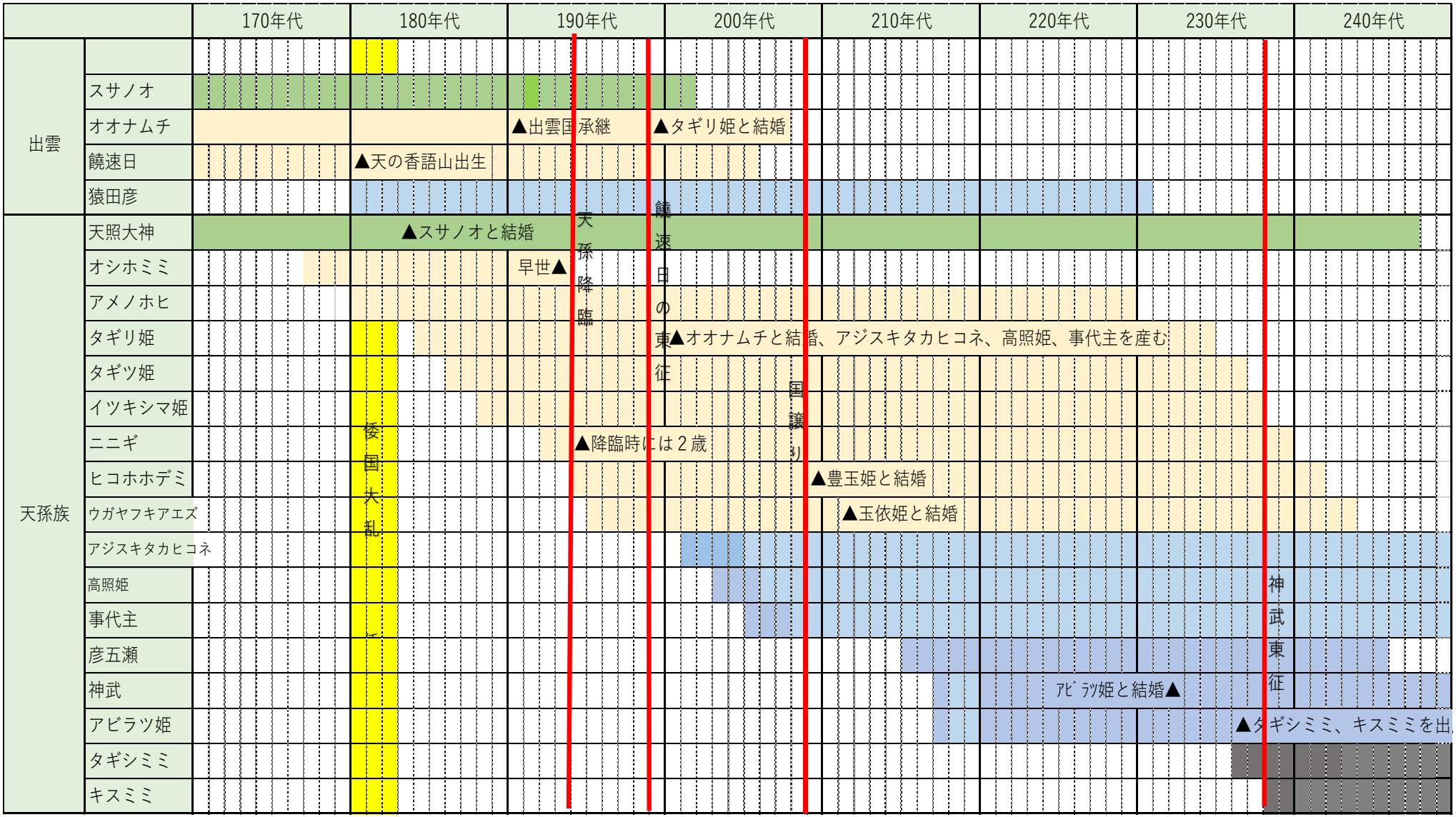
本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

人物の生存期間試案

	生年	結婚年	死亡年	死亡年齢
饒速日	163	178	205	42
スサノオ	142	157	202	60
猿田彦	180	195	事故死	
天照大神	161	176	247	86
タギリ姫	184	199	244	60
タギツ姫	186	201	246	60
イチキシマ姫	188	203	248	60
オシホミミ	178	193	193	15
ニニギ	192	207	252	60
ヒコホホデミ	194	209	254	60
ウガヤフキアエズ	196	211	256	60
神武天皇	217	232	277	60
オオナムチ	147		207	60
アジスキタカヒコネ	201	216	261	60
下照姫	203	218	263	60
事代主	205	220	265	60

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

ルールに基づく人物年表



人物年表　これは結論ではなく、仮定・前提を置くことで算出可能となった一例

本資料の著作権は、可児俊信に帰属します。無断での使用はできません。

結論

①高天原は、記紀が北部九州連合を神話化したもの。「北部九州＝高天原」
②「北部九州＝邪馬台国」は実年代（2世紀後半～3世紀中盤）が、矛盾なく一致

人物年表と邪馬台国記事、記紀が隠した史実に矛盾はない
＝北部九州国＝邪馬台国　とする仮説は成立する

よって、邪馬台国＝高天原

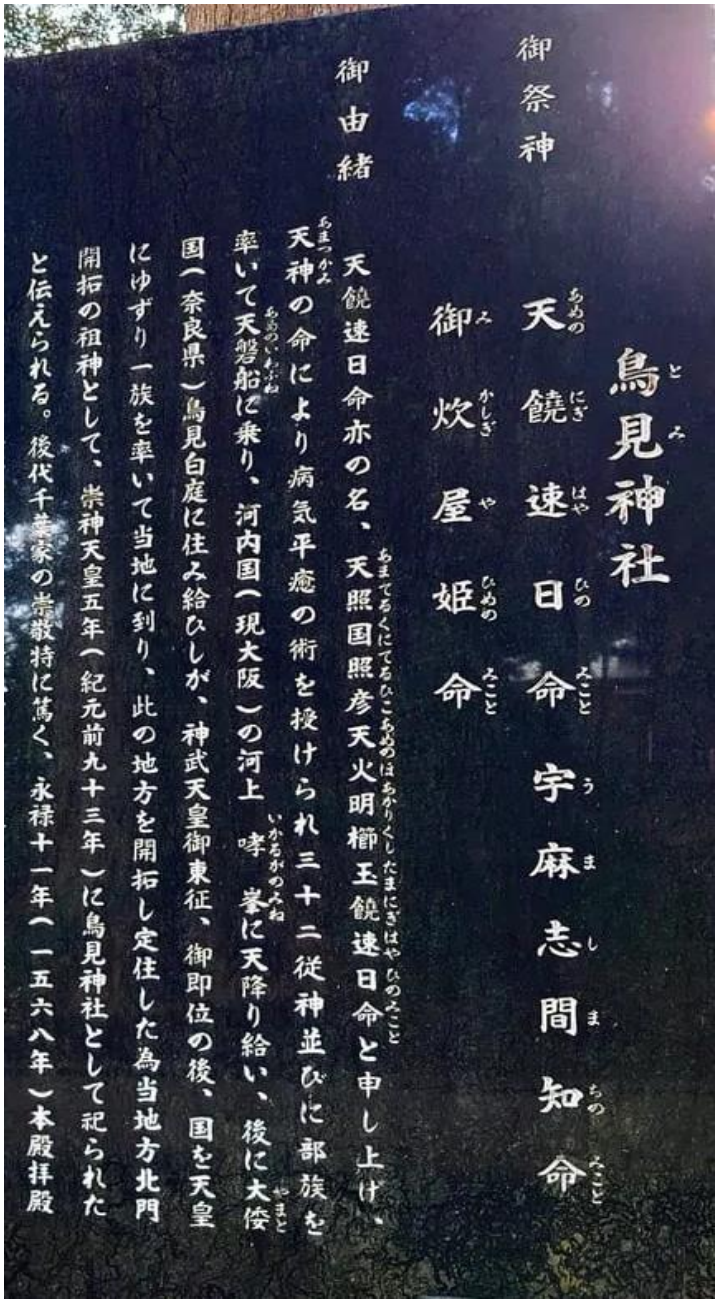
よって、卑弥呼＝天照大神

以下使用しない

鳥見神社

小林鳥見神社（印西市）
崇神5年　大和から勧請

小林鳥見神社の由緒書



鳥見神社

御祭神

天饒速日命　宇麻志間知命

御炊屋姫命

御由緒

天饒速日命亦の名、天照国照彦天火明櫛玉饒速日命と申し上げ、天神の命により病気平癒の術を授けられ三十二従神並びに部族を率いて天磐船に乗り、河内国（現大阪）の河上哮峯に天降り給い、後に大倭国（奈良県）鳥見白庭に住み給ひしが、神武天皇御東征、御即位の後、国を天皇にゆずり一族を率いて当地に到り、此の地方を開拓し定住した為当地方北門開拓の祖神として、崇神天皇五年（紀元前九十三年）に鳥見神社として祀られたと伝えられる。後代千葉家の崇敬特に篤く、永禄十一年（一五六八年）本殿拝殿

倭国大乱

１ 『三国志』魏書 巻30 東夷伝 倭人（魏志倭人伝）
「其國本亦以男子爲王住七八十年 倭國亂 相攻伐歴年 乃共立一女子爲王 名曰卑彌呼　事鬼道　能惑衆　年已長大　無夫婿」
　其の国もまた元々男子を王として70～80年を経ていた。倭国乱（倭国王の座を争う内乱。王位争奪は良く有る事だが、外国史書がわざわざ記すのは国王の座に交替があった場合のみ）。8年±数年間も相互に攻め合った。そこで、一人の女子を共立して王にした。名は卑弥呼という。鬼道を用いてよく衆を惑わした。年を取っており[1]、夫は無かった。

２ 『後漢書』巻85　東夷列傳第75
「桓靈閒 倭國大亂 更相攻伐 歴年無主 有一女子 名曰卑彌呼 年長不嫁 事鬼神道 能以妖惑衆 於是共立爲王」
桓帝・霊帝の治世の間（146年 – 189年）、倭国大乱（倭国王の座を争う内乱。外国史書がわざわざ記すのは国王の座に交替があった場合のみ）、さらに互いに攻め合い、8年±数年も主無き状態となった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、年長だが嫁いでいなかった。鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共立し王にした。

3『梁書』巻54 列傳第48 諸夷傳 東夷条 倭
「漢靈帝光和中，倭國亂，相攻伐歴年，乃共立一女子卑彌呼爲王。」
(後)漢の霊帝の光和年間（178～184）、倭国乱（倭国王の座を争う内乱。外国史書がわざわざ記すのは国王の座に交替があった場合のみ）、8年±数年も相互に攻め合った。そこで、一人の女子卑弥呼を共立して王にした。

神功皇后の神託の場面

日本書紀
「先の日に天皇に教えられたのはどこの神でしょう。どうかその御名を知りたいのです」と申された。

「伊勢の国の度会の県の、五十鈴宮にお出でになる、名は撞賢木厳之御魂天疎向津媛命ツキサカキイツノミタマアマサカルムカツヒメノミコトである」と答えられた。
「この神の他に、まだ神がお出でになりますか」
「形に現れた我は、尾田の吾田節の淡郡にいる神である」と答えられた。
「まだおられますか」と聞くと、「天事代虚事代玉籤入彦厳之事代神アメニコトシロソラニコトシロタマクシイリビコイツノオコトシロノカミがある」と答えられた。
「日向国の橘の水底にいて、海藻のように若々しく生命に満ちている神。名は表筒男ウワツツノオ、中筒男ナカツツノオ、底筒男ソコツツノオ（住吉三神のこと）の神がいる」

古事記
「今、このようにお言葉でお教えくださる大神は、そのお名前を伺いたく存じます」と申し上げると、すぐに答えて、「これは天照大御神の御心によるのだ。また底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大神であるぞ。この時にその三柱の大神のみ名は顕われたのである。今、まことに西の国を求めようとお思いならば、天つ神、国つ神や、また山の神と河海のもろもろの神々に、ことごとく幣を奉り、私の神霊を船の上にお祭りして、真木を焼いた灰を瓠に入れ、また箸と葉盤をたくさん作り、それらをすべて大海に散らし浮かべて、お渡りになるがよい」

記紀での出雲族の系譜

天照神社（天照宮）

所在地　福岡県鞍手郡宮田町大字磯光字儀長

祭神　天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、
八幡大神、春日大神、応神天皇、
天児屋根命

犬鳴川右岸の宮田町磯光に鎮守する天照神社は、古代から中世に栄えた粥田荘の惣社として古くから人々の信仰を集めた神社として知られています。

天照神社の由来は、貝原益軒著の「鞍手郡磯光神社縁起」によれば、饒速日尊が垂仁天皇十六年に宮田町の南に聳える笠置山頂（四二五メートル）に降臨し、同七十七年に笠置山頂に奉祀したことに始まります。その後、千石穂掛谷、明野（脇野）と移り、延慶元年（一三〇八）年に、白き鶴の住む里に廟を遷すべしとの神託があり、西国探題惣政所玄朝の造営により、現在地に移されました。

例祭のうち、四月の春季大祭は、往時の百手祭にちな